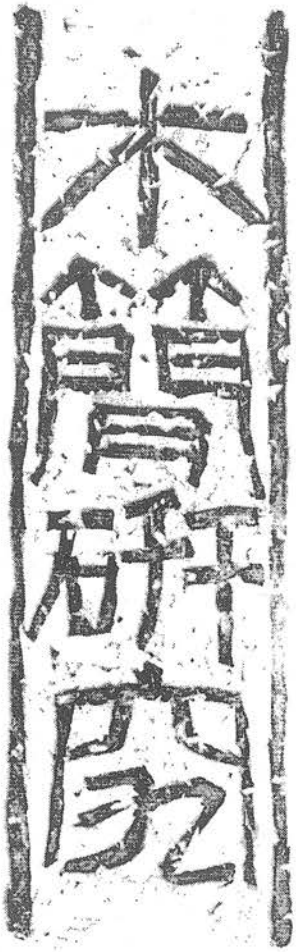
木簡研究

第二一号

木簡研究

第二一号



木簡学会

題字　藤枝　晃　刻

目　次

巻頭言――WEB版木簡データベースの公開に思う――……石上英一……i
目次……iii
凡例……vii
一九九八年出土の木簡……1
概要　舘野和己　1　奈良・飛鳥東垣内遺跡　西光慎治　30
奈良・平城京跡右京七条一坊十五坪　三好美穂・松浦五輪美　6　奈良・川原寺跡　西光慎治　31
奈良・秋篠・山陵遺跡　佐藤亜聖　8　奈良・吉備池廃寺　寺崎保広　32
奈良・薬師寺旧境内　山下信一郎　10　京都・長岡宮跡　中島信親・清水みき　33
奈良・藤原京跡右京六条四坊北西坪　濱口和弘　11　京都・平安京跡左京三条三坊十五町　吉川義彦　42
奈良・大藤原京跡左京北五条三坊南西坪　濱口和弘　12　京都・平安京跡左京七条二坊八町及び本圀寺　近藤知子　46
奈良・飛鳥池遺跡　寺崎保広　14　京都・鳥羽遺跡・鳥羽離宮跡　尾藤徳行　50
奈良・飛鳥池東方遺跡　寺崎保広　29　京都・大藪遺跡　吉崎伸　51
京都・興戸宮ノ前遺跡　藤井整　53

京都・武者ヶ谷遺跡　永谷隆夫　55
京都・河守遺跡　松本学博　57
大阪・難波宮跡　佐藤隆　58
大阪・大坂城下町跡　清水和　61
大阪・長保寺遺跡　濱田延充　62
大阪・溝咋遺跡　合田幸美　64
大阪・玉櫛遺跡　川瀬貴子　66
兵庫・釣坂遺跡　中島雄二　68
兵庫・加都遺跡　岸本一宏・甲斐昭光　70
兵庫・豊岡城館遺跡　瀬戸谷晧・宮村良雄　73
兵庫・岩井枯木遺跡　瀬戸谷晧・宮村良雄　74
兵庫・宮内黒田遺跡　小寺誠　75
兵庫・姫路駅周辺第四地点遺跡（仮称）　中川猛　77
兵庫・古網干遺跡　中川猛　79
三重・六大A遺跡　穂積裕昌　84
三重・櫛田地区内遺跡群奥ノ垣内地区　金子智子　86
三重・内垣外遺跡　西出孝　88
神奈川・宇津宮辻子幕府跡　原廣志　89
東京・汐留遺跡　斎藤進　91
東京・江戸城外堀跡（四谷御門外橋詰・御堀端通・町屋跡）　池田悦夫　98
東京・法光寺跡　成田涼子　103
東京・白鷗遺跡　小日置晴展　107
東京・池之端七軒町遺跡　小俣悟　109
東京・浅草寺遺跡　小俣悟　115
東京・上千葉遺跡　永越信吾　118
滋賀・宮町遺跡　鈴木良章・鷺森浩幸　119
滋賀・小谷城跡（伝知善院跡）　山崎清和　126
滋賀・尾上浜遺跡　松室孝樹　129
長野・屋代遺跡群（北陸新幹線関係）　水沢教子　130
長野・榎田遺跡　広田和穂　131
宮城・一本柳遺跡　菅原弘樹・吉野武　134
宮城・市川橋遺跡　古川一明・吉野武　136
岩手・柳之御所遺跡　斎藤邦雄　140
岩手・志羅山遺跡　鈴木江利子　142
山形・後田（旧月記）遺跡　野尻侃　144
秋田・洲崎遺跡　工藤直子　146
福井・福井城跡(1)　本多達哉・河村健史　148
福井・福井城跡(2)　長谷川健一　151
石川・神野遺跡　谷口明伸　154
石川・堅田B遺跡　向井裕知　156
石川・広坂遺跡　庄田知充　159

富山・中保B遺跡　根津明義　162
富山・東木津遺跡　荒井隆・岡田一広　164
富山・栃谷南遺跡　鹿島昌也　167
新潟・榎井A遺跡　桑繁治・小林昌二　169
新潟・下ノ西遺跡　田中靖　172
新潟・壱本杉遺跡　中山俊道　174
新潟・砂山中道下遺跡　石田守之　176
新潟・下町・坊城遺跡C地点　水澤幸一　180
新潟・船戸川崎遺跡　水澤幸一　182
島根・三田谷I遺跡　熱田貴保　185
岡山・熊山田散布地　馬場昌一　187
岡山・岡山城二の丸（中国電力変電所）遺構　河田健司　189
岡山・新道（清輝小）遺跡　草原孝典　192
岡山・米田遺跡　岡田博　194
岡山・百間川米田遺跡　物部茂樹　195
広島・四日市遺跡　立川敏之　197
広島・下上戸遺跡　吉野健志　198
山口・長登銅山跡　池田善文・八木充　200
徳島・観音寺遺跡　藤川智之・和田萃　204
愛媛・平田七反地遺跡　西川真美　211
福岡・元岡遺跡群　吉留秀敏　213
一九七七年以前出土の木簡（二二）……215
奈良・平城京跡左京二条二坊十坪　舘野和己　215
釈文の訂正と追加（二）……217
京都・長岡京跡（第一八号）　清水みき　217
大阪・東浅香山遺跡（第二〇号）　嶋谷和彦　218
東京・伊興遺跡（第一九号）　大崎美鈴　220

〈シンポジウム「長屋王家木簡をめぐって」の記録〉

削屑からみた長屋王家木簡……渡辺晃宏……224
長屋王家の米支給関係木簡……勝浦令子……248
長屋王家の経済基盤と荷札木簡……櫛木謙周……271
討論のまとめ……東野治之……293
木簡の撮影……井上直夫……295
書評　今泉隆雄著『古代木簡の研究』……森公章……303
彙　報……増渕徹……310
編集後記……清水みき……312
英文目次……(1)

コラム

長岡宮跡出土の死亡人帳（漆紙文書）……（清水みき）……219
秋田城跡出土の死亡人帳（漆紙文書）……（吉川聡）……222
藤原京の条坊呼称について……（寺崎保広）……309

凡　例

一、以下の木簡出土事例報告は、各木簡出土地の発掘機関・担当者に依頼して執筆していただいたものであるが、体裁及び釈文の記載形式などについては編集担当の責任において調整した。執筆者の所属が発掘機関と異なる場合には、執筆者名に註記を加えた。

一、報告は「一九九八年出土の木簡」、「一九七七年以前出土の木簡」、及び「釈文の訂正と追加」の三欄に分けて掲載した。

一、各欄ごとの遺跡の排列は、それぞれほぼ奈良時代の五畿七道の順序に準じた。

一、各遺跡の記載は、所在地、調査期間、発掘機関、調査担当者、遺跡の種類、遺跡の年代、遺跡及び木簡出土遺構の概要、木簡の釈文・内容、関係文献（当該木簡掲載の報告書など）の順とし、建設省国土地理院発行の五万分の一地形図を使用して、木簡出土地点を▼で示した。（　）内は図幅名である。

なお、「釈文の訂正と追加」の欄では、当該報告が掲載された本誌の号数を遺跡名の下に（　）で明記し、地図は原則として割愛した。また、「遺跡及び木簡出土遺構の概要」は省略し、必要な場合は「木簡の釈文・内容」において最少限の言及を行なった。

一、紹介する木簡には遺跡ごとに木簡番号を付し、()で示した。数次の調査の木簡を一括して紹介する場合は、調査ごとの通し番号とした。なお、「釈文の訂正と追加」では、既報告木簡の訂正、新出木簡の追加の順とし、一括して通し番号を付した。

一、釈文の漢字は概ね現行常用字体に改めたが、「實」「證」「龍」「廣」「盡」「應」などについては正字体を使用し、異体字は「マ」「芹」「芊」「季」「躰」などについてのみ使用した。

一、釈文下段のアラビア数字は、木簡の長さ（文字の方向）・幅・厚さを示す（単位は㎜）。欠損している場合の法量は括弧つきで示した。その下の三桁の数字は型式番号を示す。また、それぞれの発掘機関における木簡番号がある場合には最下段に示した。なお、「釈文の訂正と追加」の欄において釈文を訂正する木簡については、型式番号の次に既掲載号数と木簡番号を17(2)のごとく付した。

一、釈文に加えた符号は次の通りである（ix頁第1図参照）。

「　」　木簡の上端ならびに下端が原形をとどめていることを示す（端とは木目方向の上下両端をいう）。

＜　木簡の上端・下端などに切り込みのあることを示す。

〜〜　抹消された文字であるが、字画の明らかな場合に限り原字の左傍に付した。

○　穿孔のあることを示す。

■■　抹消により判読困難なもの。

□□□　欠損文字のうち字数の確認できるもの。

□　欠損文字のうち字数が推定できるもの。

□□　欠損文字のうち字数の数えられないもの。

×　前後に文字の続くことが内容上推定されるが、折損などにより文字が失われているもの。

『』　異筆、追筆。

＼　合点。

・　木簡の表裏に文字のある場合、その区別を示す。

〔〕　校訂に関する註で、原則として釈文の右傍に付し、本文に置き換えるべき文字を含む場合。

（）　右以外の校訂註および説明註。

〔×〕　文字の上に重書して原字を訂正している場合、訂正箇所の左傍に・を付し原字を上の要領で右傍に示す。

カ　筆者・編者が加えた註で疑問の残るもの。

マ、　文字に疑問はないが意味の通じ難いもの。

……　同一木簡と推定されるが、折損などにより直接つながらず、中間の文字が不明なもの。

‖　組版の関係で一行のものを二行以上に組まなければならなかった場合、行末・行初につけたもの。

＊　巻頭図版に写真の掲載されているもの。

一、釈文の最下段に三桁で示した型式番号は、木簡の形態を示し、つぎの一八型式からなる（ix頁第2図参照）。

011型式　短冊型。

015型式　短冊型で、側面に孔を穿ったもの。

019型式　一端が方頭で他端は折損・腐蝕で原形が失われたもの。

021型式　小形矩形のもの。

022型式　小形矩形の材の一端を圭頭にしたもの。

031型式　長方形の材の両端の左右に切り込みをいれたもの。方頭・圭頭など種々の作り方がある。

032型式　長方形の材の一端の左右に切り込みをいれたもの。

033型式　長方形の材の一端の左右に切り込みをいれ、他端を尖らせたもの。

039型式　長方形の材の一端の左右に切り込みがあるが、他端は折損あるいは腐蝕して不明のもの。

041型式　長方形の材の一端の左右を削り、羽子板の柄状に作ったもの。

043型式　長方形の材の一端を羽子板の柄状に作り、残りの部分の左右に切り込みを入れたもの。

049型式　長方形の材の一端を羽子板の柄状にしているが、他端は折損・腐蝕などによって原形の失われたもの。

051型式　長方形の材の一端を尖らせたもの。

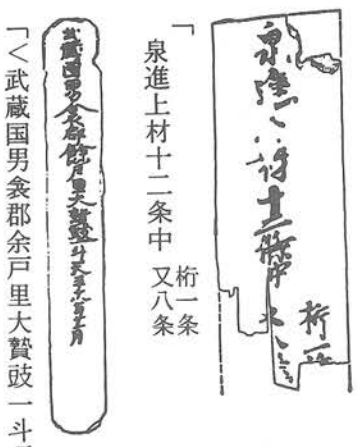
059型式　長方形の材の一端を尖らせたものであるが、他端は折損あるいは腐蝕して不明のもの。

061型式　用途の明瞭な木製品に墨書のあるもの。
065型式　用途未詳の木製品に墨書のあるもの。
081型式　折損、腐蝕その他によって原形の判明しないもの。
091型式　削屑。

なお、中・近世の木簡については、以上の型式番号に適合しないものが多いので、註記を省略する場合がある。

一、この凡例は木簡出土事例報告に関するものであり、論文などにおいては、必ずしもこれを用いるものではない。

一、英文目次は天理大学の Walter Edwards 氏にお願いした。

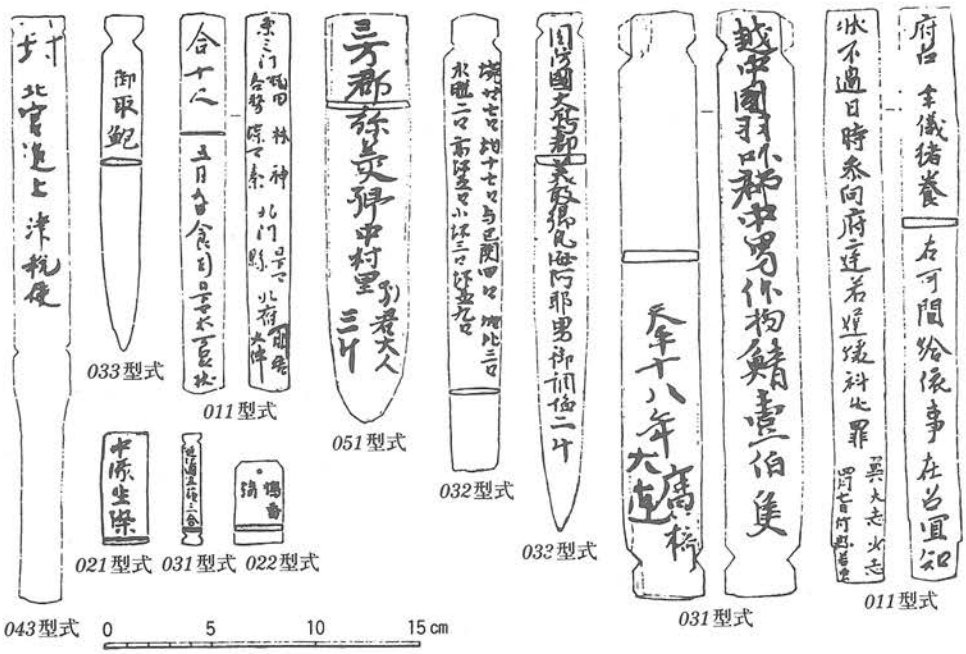


×位下財椋人安万呂
×行夜使仍注状故移」

「泉進上材十二条中　桁一条
又八条」

「〈武蔵国男衾郡余戸里大贄豉一斗天平十八年十一月」

第1図　木簡釈文の表記法



第2図　木簡の形態分類

奈良・平城京（へいじょうきょう）跡右京七条一坊十五坪

1　所在地　奈良市六条町

2　調査期間　第三四九次調査　一九九六年（平8）五月～七月

3　発掘機関　奈良市教育委員会・奈良市埋蔵文化財調査センター

4　調査担当者　三好美穂

5　遺跡の種類　都城跡

6　遺跡の年代　奈良時代、室町時代

7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

本調査は老人保健施設建設に伴う事前調査である。調査地は平城京の条坊復原では、右京七条一坊十五坪の北東隅にあたり、調査地の東側には十・十五坪の坪境小路西側溝が想定されている。これまでに十五坪内では、一九八五年度に奈良市教育委員会が西辺部で調査（第九七次調査）を行なっており、

（奈　良）

西一坊大路東側溝、奈良時代の掘立柱建物・塀・井戸、平安時代の井戸などを検出している。平安時代の井戸は、井戸枠に「湯屋□延久参年四月十日」と墨書された曲物が使用されており、遺構の構築時期や出土遺物の実年代を知る手がかりを得るなどの成果をあげている（本誌第八号）。

これらの成果を踏まえ、小路西側溝の検出及び奈良～平安時代の宅地の様相を把握することを目的として、約一〇八〇㎡の調査区を設定した。

調査の結果、十・十五坪の坪境小路西側溝、奈良時代の掘立柱建物四棟、掘立柱塀一条、井戸二基、土坑一基、室町時代の粘土採掘坑、奈良時代以前の旧河道を検出した。

粘土採掘坑は、調査区全体の約七〇％を占めており、検出面からの深さは、浅い所で〇・三m、深い所では一・〇mもある。土坑内の埋土は、黄褐色粘土のブロックを含んだ灰色粘土である。埋土からは、奈良時代の土器類、軒丸瓦、石鈎（丸鞆・巡方）の未成品、鎌倉時代の瓦器、室町時代の瓦質土器擂鉢が出土した。瓦質土器擂鉢を検出した地点のうち六ヵ所は、意識的に据えて埋められたかのような状態であった。

これらの粘土採掘坑により、奈良時代の遺構の多くが壊されたらしく、旧河道上に構築された遺構がかろうじて残存するだけであった。建物の柱掘形は一辺〇・六mと比較的大きいものが見られるも

のの、発掘区外へ続くものや柱掘形が壊されているなど、建物規模がわかるものがない。

木簡が出土した井戸は、発掘区中央部付近で検出した。掘形の上部〇・三m程は粘土採掘坑で壊されていたが、その下は深さ三・一mまで残存していた。掘形は東西三・四m南北三・六mの平面方形である。井戸枠は抜き取られたらしく残存していなかった。埋土から、木簡、奈良時代中頃の土師器・須恵器・奈良三彩小壺蓋・丸瓦・平瓦が少量出土した。

8 木簡の釈文・内容

(1) 「西一二三四五六七 (220)×(23)×5 081

(2) ・「北一二三四□□〔五六カ〕 (158)×(8+9)×6 081

・「□□□□□〔四カ〕

□

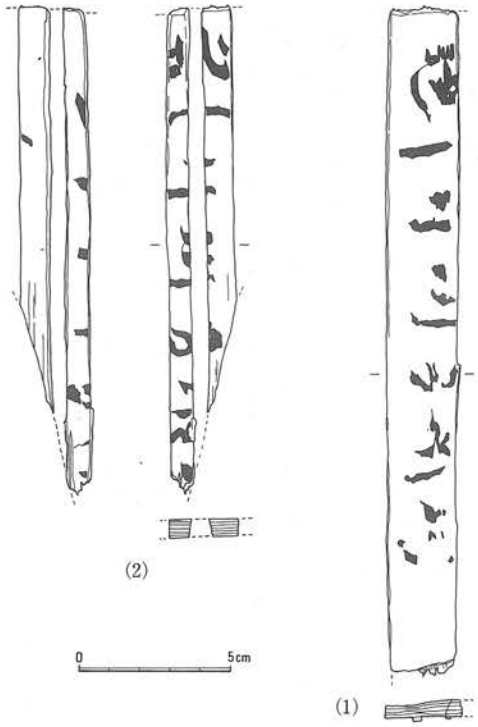
(2)はわずかの欠失部をはさんで文字が接合する二片からなり、墨書後に割り裂いていることがわかる。墨書はいずれも方位と数字を記したものであるが、用途は不明。

木簡の釈読については、奈良国立文化財研究所の舘野和己・渡辺晃宏・古尾谷知浩（当時）・山下信一郎の諸氏のご教示を得た。

9 関係文献

奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成八年度』（一九九七年）

（三好美穂・松浦五輪美）



奈良・薬師寺旧境内

1 所在地　奈良市西ノ京町

2 調査期間　平城宮跡第二九三―八次調査　一九九九年（平11）三月～四月

3 発掘機関　奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部

4 調査担当者　代表　田辺征夫

5 遺跡の種類　寺院跡

6 遺跡の年代　古代～近世

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

調査地は、平城京右京六条二坊八坪にあたり、薬師寺の旧境内地である。玄奘三蔵院（一九八三年度発掘調査区）の北西に位置し、奈良時代の「苑院」の推定地である。中世以降は子院が建ち並び、一七世紀後半の絵図によると福蔵院が所在していた。今回、薬師寺法具蔵建設に伴い、東西約一八m南北約九m、合計一五八㎡を発掘した。

（奈良・桜井）

その結果、掘立柱建物数棟・井戸四基・溝四条・土坑多数を検出した。調査区西端で検出した南北溝SD二七一〇は、薬師寺造営当初に開削され、一〇世紀頃まで機能した溝。苑院区画の西側溝である可能性がある。また、調査区西半で一一世紀後半～一二世紀中頃の掘立柱建物を五棟検出した。うち一棟は礎石建物の可能性がある。さらに調査区中央で検出した石組井戸SE二七二〇は、最下部に幅二〇㎝の板材を敷き、大小の曲物を上下に重ねる構造である。

木簡一点が出土したのは、調査区中央北辺で検出した井戸SE二七一五の底部堆積土からである。井戸枠は既に抜き取られていたが、抜取穴から一〇世紀中頃～一一世紀後半の土器・瓦が出土している。木簡の年代もそれ以前の平安時代か。

8 木簡の釈文・内容

(1)

393×34×2　051

墨付きは表面だけで、一行書きに仮名かと思われる割書が確認できるが、全体的に墨の残りが悪く、釈読不能である。

9 関係文献

奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所年報一九九九―Ⅲ』（一九九九年）

（山下信一郎）

奈良・藤原京跡右京六条四坊北西坪

1 所在地　奈良県橿原市小房町

2 調査期間　一九九八―一五次調査　一九九九年（平11）一月～三月

3 発掘機関　橿原市教育委員会

4 調査担当者　濱口和弘

5 遺跡の種類　都城跡

6 遺跡の年代　七世紀末～八世紀初

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

本調査は、都市公園築造に伴うものである。調査地は、「かしはら万葉ホール」の南東約二〇〇mに位置し、西約五〇mには藤原京西四坊大路・下ツ道（現国道一六九号線）が南北に通る。また、藤原京復原条坊では、右京五条四坊南西坪・同六条四坊北西坪にあたり、対象地の北部に五条大路推定線が通る。

（桜井・吉野山）

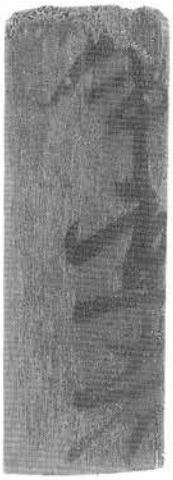
今回の調査で検出した主な遺構は、中・近世の水田耕作に伴う小溝群、藤原京期の道路側溝（五条大路北側溝）・掘立柱建物・井戸・土坑・溝などで、これらの遺構に伴う遺物が出土した。

今回報告する木簡は、第二トレンチで検出した藤原京期の井戸（〇八七―SE）から出土したものである。この井戸は、直径約二・二m深さ約一・六二mを測る。井戸枠は全て抜かれていたが、木簡以外に土師器・須恵器の杯・甕・壺などが出土している。

8 木簡の釈文・内容

(1)　□直者」〔奉カ〕　(83)×(29)×3　081

上端と右側面が欠損している。第一字が「奉」であれば、「…シ奉ル。直セル者…」（以下、裏へ）となり、「奉」ではなく他の文字であれば、第一字は物品名の可能性があり、その場合は「□ノ直者」となる（以下、裏面へ）。



なお本木簡の釈読にあたっては、奈良国立文化財研究所寺崎保広氏のご教示・ご協力をいただいた。（濱口和弘）

奈良・大藤原京跡左京北五条三坊南西坪

1 所在地　奈良県橿原市常盤町

2 調査期間　一九九七―一八次調査　一九九七年（平9）九月～一九九八年三月

3 発掘機関　橿原市教育委員会

4 調査担当者　濱口和弘・米田　一

5 遺跡の種類　都城跡

6 遺跡の年代　七世紀末～八世紀初

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

本調査は、都市計画道路「中和幹線」建設に伴うものである。調査対象地は、橿原市の北東部にあたり、耳成山から北東へ約一kmの水田地帯に位置する。調査区（トレンチ）は計一〇ヵ所（第一～第一〇トレンチ）設定し、約三八〇〇㎡を調査した。

調査対象地は、大藤原京復原条坊の左京北五条二～四坊にあたり、また、縄文時代晩期から古墳時代中期にかけての集落跡である坪井・大福遺跡の一部も対象地に含まれる。

本調査で出土した主な遺構は、中・近世の水田耕作に伴う小溝群、藤原京期の道路側溝（東二坊々間路東側溝・東二坊大路西側溝・東三坊々間路東側溝）・掘立柱建物・旧河道、古墳時代の土坑・溝、弥生時代の溝などで、これらの遺構に伴う遺物が出土した。

今回報告する二点の木簡は、第七トレンチの西部で検出した南東―北西方向の藤原京期の旧河道（〇〇一―NR）から出土したものである。この旧河道は、幅八・五m深さ一mを測り、西岸の一部には護岸を目的とした杭が十数本打ち込まれており、部分的には横木も遺存していた。また旧河道からは、木簡以外に土師器・須恵器の杯・甕・壺や木製横櫛などが出土している。

8 木簡の釈文・内容

(1)　「〈米五斗一升」　90×12×3　033

(2)　・□資人□〔合ヵ〕□、浄正五位下茨田×

・□□□八木造□〔古ヵ〕　(237)×(15)×5　081

(1)は上端に切り込みがあり、下端を尖らせた付札木簡である。表面のみに墨書が認められ、物品の内容を表記しているものであろう。

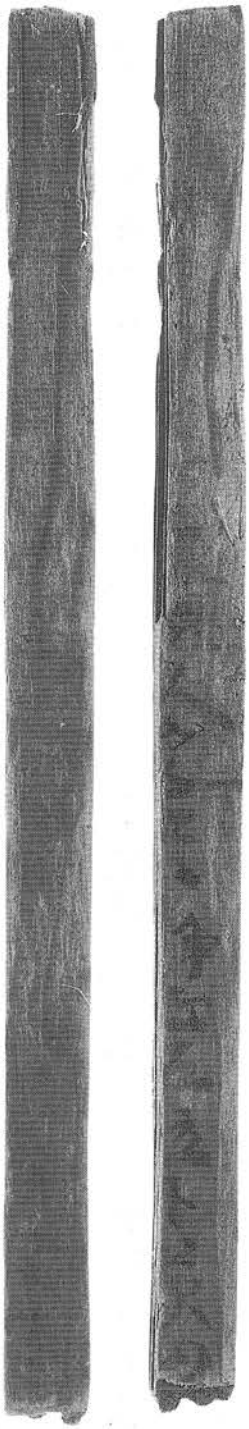
(2)は上下両端と左右両側面が欠損しているが、表裏両面に墨書が

認められ、皇親の資人に関する内容が記述されている木簡である。そして、表面の「浄正五位下」という冠位と位階を併記した記述例は、『続日本紀』大宝元年（七〇一）三月甲午条、大宝二年「御野国戸籍」（正倉院文書）、藤原宮跡出土木簡（奈良国立文化財研究所『藤原宮木簡一』四九四号）などにある。このような冠位と位階を併記する記述は以後見られなくなり、この木簡は七〇一年を上限に、二・三年程しか下らない、極めて限定された年代を与えることができるものと考えられる。

また、「浄正五位下」の記述を、浄御原令において諸王に与えられた冠位の「浄」冠と、大宝令の新位階（「正五位下」）が併記されているものとするなら、この時期に該当する人名は見当たらないものの、「茨田×」とは「茨田王」と考えられ、先に挙げた『続日本紀』大宝元年三月条に記載されている「諸王十四人」の一人である可能性が考えられる。一方、裏面の「八木造」らは、「茨田王」に与えられた資人たちの名を表記しているものと思われる。

なお、本木簡の釈読にあたっては、奈良国立文化財研究所寺崎保広氏にご教示・ご協力いただいた。

(1)



(2)

9 関係文献

橿原市千塚資料館『かしはらの歴史をさぐる』六（一九九九年）

（濱口和弘）

奈良・飛鳥池遺跡

1　所在地　奈良県明日香村飛鳥

2　調査期間　第八四次　一九九七年（平9）一月～一二月
　　第八七次　一九九七年一二月～一九九八年七月
　　第九三次　一九九八年六月～一九九九年二月

3　発掘機関　奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部

4　調査担当者　代表　猪熊兼勝・黒崎　直

5　遺跡の種類　生産遺跡・寺院跡

6　遺跡の年代　七世紀後半～八世紀初期

7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

（吉野山）

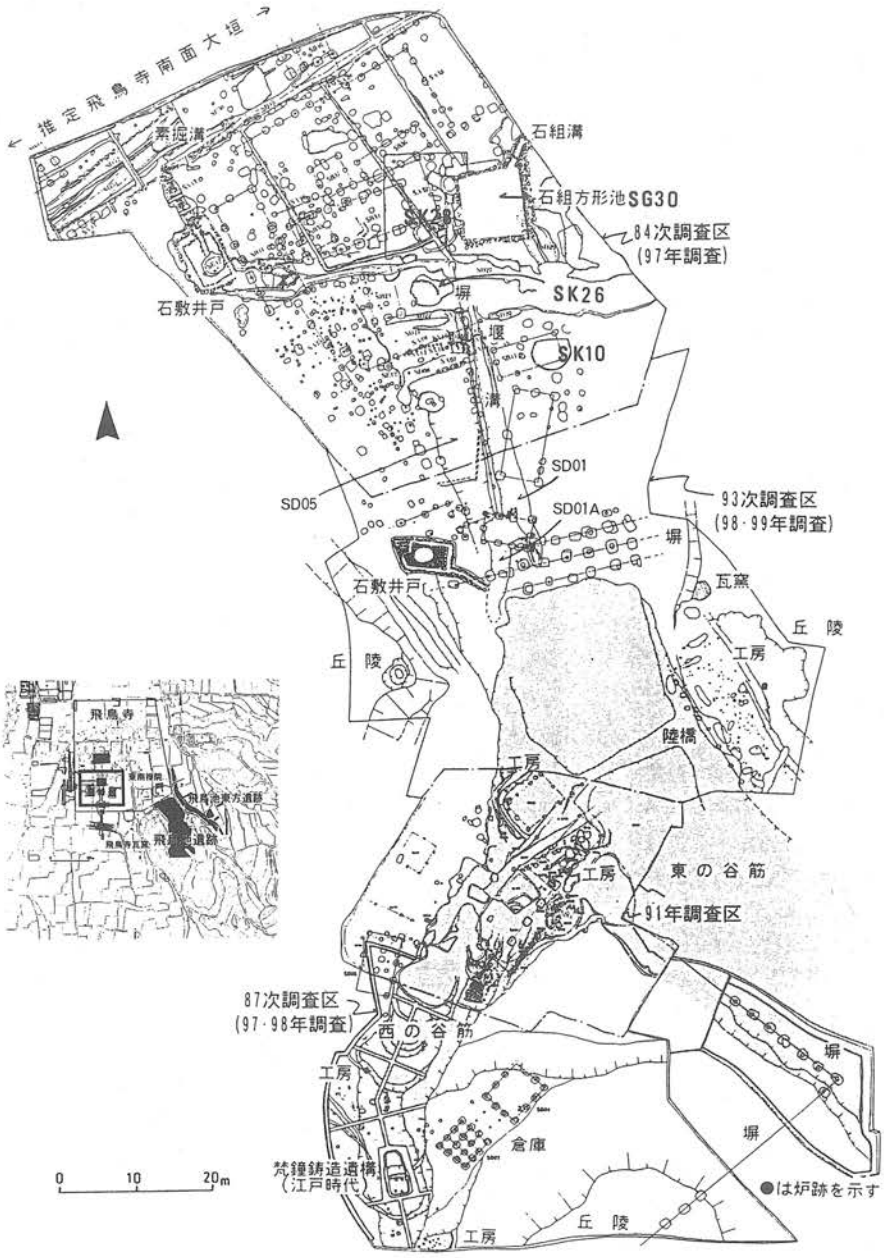
飛鳥池遺跡とは、飛鳥寺の東南、酒船石遺跡の北にあった近世の溜池「飛鳥池」による名称である。一九九一年に、この池を埋め立てることとなり、事前調査を実施したところ、七世紀後半を中心とする時期の鉄・銅・ガラス・漆などの工房跡が確認され、多数の遺物が出土した。この調査では木簡も一〇〇点余出土し、注目された（本誌第一四号参照）。

その後、この場所に奈良県立の万葉ミュージアム（仮称）を建設するという計画が示されたため、工房の拡がりとその実態解明を主な目的として、一九九七年一月から継続して発掘調査を行なった。

調査区全体の地形は、南及び東西に低い丘陵があり、その間に逆Y字状に谷があり、南が高く北に開いている。

調査の結果、対象とした範囲の中央付近に、谷を堰き止める形で三時期にわたる塀が確認され、これを境として南北二つの地区に分けて考えるべきことが判明した。すなわち、南半部が工房跡であり、北半部はこれとは性格を異にする一郭である。

南半部の工房跡では、丘陵の斜面を部分的に平坦にならし、そこに多数の炉を設けて作業を行なっている。そして、作業の過程で出てくる大量の炭、炉に使われたフイゴ羽口や坩堝、未成品などが、谷筋に廃棄された。その堆積は最も厚いところで八〇㎝に及び、それらは土ごと整理室に運んで、洗浄しながら細かい遺物を抽出している。その結果、この工房で製作された製品は、先に挙げたもの以外にも、金・銀製品、あるいは瑪瑙・琥珀・水晶といった玉類など、多種多様であることが判明した。工房が稼働していた時期としては、一部は七世紀中頃から開始されるが、七世紀後半から末頃に最盛期をむかえ、八世紀初頭まで続くとみられる。したがって、飛鳥浄御


推定飛鳥寺南面大垣
素掘溝
石組溝
石組方形池SG30
84次調査区
(97年調査)
SK26
石敷井戸
堰
SK10
溝
SD01
SD05
SD01A
93次調査区
(98・99年調査)
堰
石敷井戸
瓦窯
丘陵
工房
丘陵
陸橋
工房
東の谷筋
工房
91年調査区
87次調査区
(97・98年調査)
西の谷筋
工房
倉庫
堰
堰
梵鐘鋳造遺構
(江戸時代)
0 10 20m
●は炉跡を示す
工房
丘陵
飛鳥寺
飛鳥池遺跡

飛鳥池遺跡遺構図

原宮～藤原宮にかけての時期の総合的な工房であったと評価できる。

そして特に注目されるのが銅銭「富本銭」の出土である。総数三〇〇点を超す富本銭の中には、出土状況からみて確実に和同開珎に先行するものが含まれるから、富本銭がわが国最古の銅銭であり、天武紀一二年四月条に見える「銅銭」に該当する可能性が高い。しかも、ここでは鋳バリや鋳型も伴うことから、富本銭はここの工房で鋳造していたことが明らかとなり、そのことは工房の性格を考える上で重要である。すなわち、宮廷所属の工房と見てよかろう。

一方、北半部は対照的に炉跡がほとんど見られず、むしろ建物・塀・井戸といった遺構によって構成されている。特に周囲に石を敷きつめた井戸二基と、一辺八mほどの方形の石組池などの存在が注目される。この場所は、これまでの飛鳥寺に関わる発掘の成果からすると、寺の東南部がかかる可能性があった。つまり、寺院を限る南面の塀と東面の塀を延長すると、その交点が第八四次調査区内に想定された。ところが、そうした施設は検出されず、発掘区北辺で道路の南側溝を確認した。したがって、飛鳥寺の寺域は、東南部分にかかる丘陵を避ける形で収束していたものと判断した。つまり、飛鳥池遺跡北半部は、飛鳥寺東南隅の外側に接しているのである。ただし、後述する木簡の内容から考えると、寺域外側であるとはいえ、飛鳥寺と密接に関連した場所とみるべきであろう。

以下では木簡が出土した次数に限り、出土遺構を中心に記述する。

一　第八四次調査

対象となる範囲の最も北にあたり、平坦部が中心となる。発掘面積三〇〇七㎡。木簡は、合計七六六〇点が出土した。出土遺構ごとの木簡点数は次のとおり。括弧内は削屑の内訳を示す。

土坑SK一〇　二一九八（二一二〇）点
方形池SG三〇　一一点
方形池外側の整地土・土坑群　一四点
南北溝SD〇一　一二六一（一〇七三）点
南北溝SD〇五　三三九三（二九八一）点
土坑SK二六　七〇六（五六二）点
土坑SK二八　六点
その他の遺構・出土遺構不明　七一（五四）点

これらのうち、主な遺構の概略を次に述べる。

SK一〇は、調査区東南部で検出した素掘りの土坑。東西五・二m南北四mの楕円形で、深さ一・七mある。堆積土は三層に大別され、このうち上層の木屑層を中心に木簡が出土した。年紀をもつ木簡は一点もないが、(4)「粒評石見里」という表記からみて、七世紀末（天武朝末年以後か）の年代が与えられる。

SG三〇は、調査区東辺で検出した方形の石組池。東西七・九m南北八・六m。池の四周は急傾斜の玉石積で、その最も高く残っている部分では八段、高さが一・六mある。池は七世紀後半に造られ、

奈良時代まで存続した。池の導水路は、当初は西南隅に注ぐ南北溝ＳＤ〇一であったが、奈良時代以降は池の東南隅に注ぐ南北溝ＳＤ二九にかわっている。排水路は、池の東北隅にある石積の水路であり、そこから北へ排水した。木簡は池底近くの堆積土と池を埋めた埋土から出土した。この池の周囲の整地土や大小の土坑群から計一四点の木簡が出土したが、遺構の年代などは検討中である。

ＳＤ〇一は、素掘りの南北溝で、北流し、方形池ＳＧ三〇に注ぐ。方形池より南約一二ｍの位置に石組の護岸を伴う堰があり、このあたりでは溝幅約一ｍ深さ〇・五ｍであるが、そこから南では溝の規模が大きくなり、調査区南端では幅約三ｍ深さ約一ｍとなる。堰より南の溝底には木屑層が分厚く堆積し、大量の木簡が出土した。年紀を記すのは、⒀の「丁丑年」のみで、天武六年（六七七）にあたる。

ＳＤ〇五は、ＳＤ〇一の西側を平行して流れる南北溝で、溝幅が六～七ｍ深さ〇・七～一ｍあり、やはり北流し、方形池の西をさらに北へ伸びる。木簡や削屑を大量に含む腐植土層を何層も挟んで堆積している。年紀を記すのは、⒁「庚午年」、⒂「丙子」、⒅「丁丑年」の三点である。「庚午年」は天智九年（六七〇）、「丙子」年は天武五年（六七六）にあたる。

ＳＤ〇一とＳＤ〇五が最終的に埋められた時期は、両溝出土遺物からみて、一応持統朝頃と考えている。ただし、木簡は両溝の下層から出土しており、木簡に見えるサトの表記がいずれも「五十戸」となっていて、「里」という木簡が一点もないことは重要で、あるいは木簡に関しては天武朝におさまるかもしれない。

ＳＫ二六は、東西六・五ｍ、南北四ｍ、深さ一・四ｍの不整形土坑で、埋土は三層に大別され、木簡はこのうち第二層を中心に出土した。南北溝ＳＤ〇五の埋土を切って掘り込まれている。この土坑からも年紀を記す木簡はないが、荷札木簡にみえる地名表記がいずれも「国・郡・里」となっているから、大宝元年（七〇一）から霊亀三年（七一七）の間の年代であろう。

二　第八七次調査

対象となる範囲の最も南にあたり、北に向かって傾斜する丘陵部である。発掘面積一九〇〇㎡。工房に関わる炉、倉庫とみられる二棟の掘立柱建物などを検出した。木簡は、発掘区の北辺部で、炉から廃棄された炭の層から一点出土したが、釈読できない。したがって釈文は省略する。

三　第九三次調査

遺跡の中央部分にあたり、北は第八四次調査区と、南は一九九一年度調査区と接している。発掘面積二二〇〇㎡である。初めに述べたように、性格の異なる二地区にちょうどまたがっている発掘区である。

木簡は、合計九七点が出土した。木簡出土遺構は北地区では南北

溝SD〇一から八点、これの南に接続する斜行溝SD〇一Aから二一点、南北溝SD〇五から六点、その他の遺構から八点である。南地区では、工房から廃棄された大量の炭の層から四八点、炭層の下層の整地土から五点、土坑から一点の計五四点である。木簡出土遺構、層位、およびそれらの年代については現在検討中である。

8　木簡の釈文・内容

一　第八四次調査

土坑SK一〇

(1)
・「恐々敬申　院堂童子大人身病得侍　」
・「故万病膏神明膏右□一受給申　願恵知事」　309×31×3　011

(2)
・「世牟止言而□
□本止飛鳥寺
・「□□□□　(75)×(22)×3　081＊

(3)
・×月卅日智調師入坐糸卅六斤半
・又十一月十二日糸十斤出　受申□□　(286)×(28)×3　081＊

(4)
・「〈粒評石見□〔里カ〕」
・「〈　□　□」　(106)×26×3　039

(5)
・□千字文□□□〔勅員外カ〕×
・　□　□□　(128)×(11)×5　081

(6)
観勒□
大夫　(131)×(39)×(10)　065

(7)
禅院　091

方形池外側の土坑群

(8)
・南　請葛城明日沙弥一人
・『天天天天天天天□天天』　(252)×25×3　065

南北溝SD〇一

(9)
・□〔智カ〕照師前謹白昔日所　」
・「白法華経本借而□□〔賜カ〕」　223×20×3　011

(10)
・「
冊心者　一者十信　二者十解　三者十句　四者十□〔廻カ〕向　次四種善根者　一×　二者□　三者□
・「比丘者□〔死カ〕者怖魔□□
□〔向東死カ〕□者□初阿羅漢□又百体羅□
□仏入□〔者カ〕怖□□　(185)×(29)×2　065

(11)
・□多心経百合三百『□』
・十一□　『□』　(162)×15×3　081

(12)
・「甘草一両　豉一升
・「桂心二両□　□　(129)×(17)×4　081

(13)
・「〈丁丑年十二月三野国刀支評次米」
・「〈恵奈五十戸造　阿利麻
　春人服ア枚布五斗俵　」　151×28×4　032*

(14)
□□戸年六十一老夫丁　初□〔作カ〕　(138)×11×2　081

(15)
・□□作佛□〔説カ〕
・金屑　(88)×20×8　081

(16)
・止求止佐田目手□〔和カ〕
・□□
・□□□□□
・□久於母閉皮　(103)×(16)×3　081

南北溝SD〇五

(17)
・「小升三升大□〔師カ〕借用又三升
『□　□　□』
者賜大俵一　性道　受者道性女人賜一俵」
又五月廿八日飢　六月七日飢者下俵二」
(190)×29×3　019*

(18)
「〈　加尓評久々利五十戸人〈
丁丑年十二月次米三野国
物ア　古麻里　」
146×31×4　031*

(19)
「経借同日」　112×35×8　011

(20)
・『軽寺』波若寺〔ママ〕　瀆尻寺　日置寺　春日ア　矢口
石上寺　立ア　山本　平君　龍門　吉野
・『□□□　□□　□□　□□』　(203)×36×9　081*

(21)
「〈軽銀卅一半秤」　94×17×3　032*

(22)
・「〈難波銀十」
・「〈八秤　」　81×15×3　032*

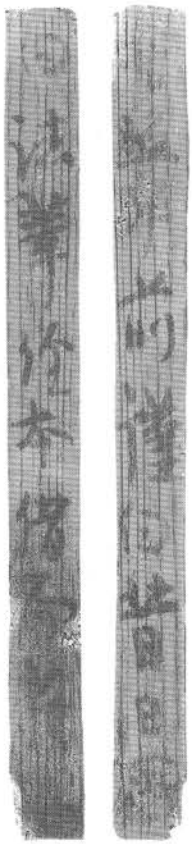
(23)
・「○経蔵□〔益カ〕」
・「○□□」　105×(18)×8　081

(24)
・「〈陽〔ママ〕沐戸海ア佐流〈」
・「〈調　〈」　152×19×5　031

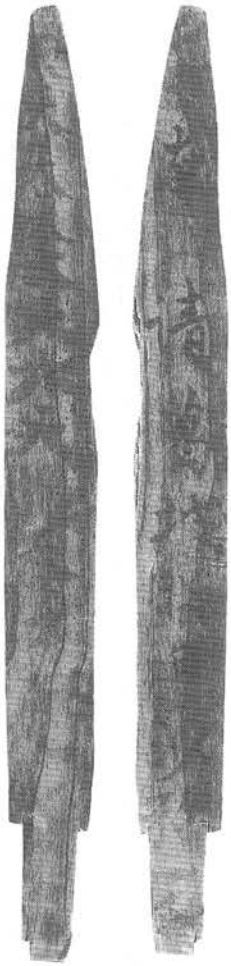
(25)
「〈尾張海評□□五□〔十戸カ〕　127×22×2　032

(26)
「〈次評上ア五十戸巷宜ア〈」
□□□軍布□□〔刀由弥カ〕　168×27×5　031

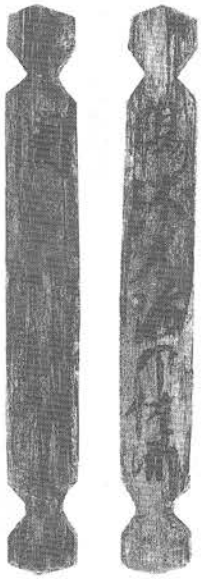
(10)



(9)



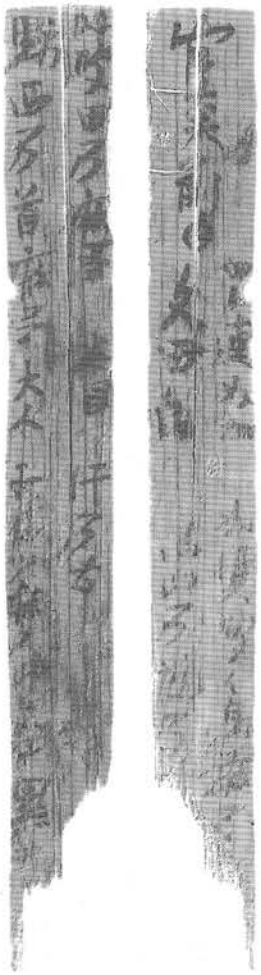
(8)



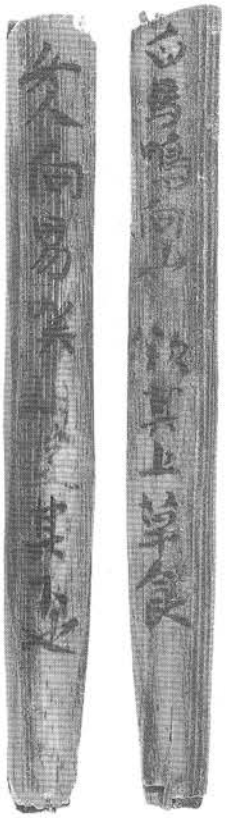
(24)

(38)

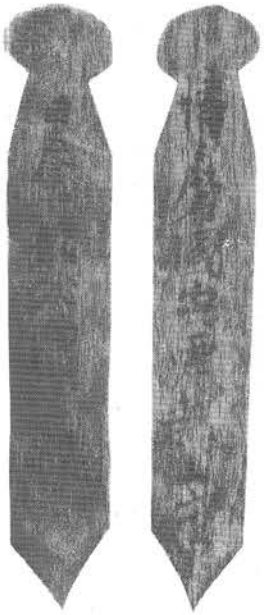
(30)



(56)



(37)



(41)

(48)

(42)

(47)

(27)
・×我評高殿」
・秦人虎　」　(73)×18×3　019

(28)
〈三間評　小豆□□　(134)×21×5　032

(29)
「〈弥奈ア下五十戸」　131×23×7　032

(30)
「〈三枝ア赤男鯛」　123×21×3　032

(31)
「庚午年三×　(77)×20×4　019

(32)
・「〈丙子鍬代四机　」
・「〈□代□□尺四机」〔一匹カ〕　114×23×4　032

(33)
・〈大芔〔菩薩〕被四副
・〈長十尋一被　(80)×16×4　039

(34)
「〈桑根白皮」　129×24×3　032

(35)
「〈伊支須」　98×27×5　032

(36)
「○弁徳」　152×27×3　011

(37)
・「白馬鳴向山　欲其上草食」
・「女人向男咲　相遊其下也」　213×24×11　011

(38)
「天皇聚〔露カ〕□弘寅□　(118)×(19)×3　081

(39)
・「観世音経巻　」
・「支為□支照而為〔昭カ〕」（左側面）
・「子曰学□□是是」　145×21×20　011

(40)
・×□□□□□（右側面）
・推位〔讓〕□国
・□□□□□□（左側面）　156×24×10　011

土坑SK二六

(41)
・「〈播磨国宍粟郡山守里」
・「〈日奉ア奴比白米一俵」　165×28×5　033

(42)
・「〈播磨国宍禾郡三方里」
・「〈神人□〔時カ〕万呂五斗　」　158×20×6　033

(43)
「宗加ア里人宗加ア真知」　190×19×2　051

(44)
・「熊汙吾羆彼下迺布恋尓□蔦上横詠営詠」
・「蜚皮伊尸之忤懼　」　187×15×5　051＊

(1)の「願恵」は「院」の「知事」で、そこから寺内の薬品保管部

局に薬を請求した木簡。「知事」は寺院の庶務を担当する役職で、『日本書紀』朱鳥元年（六八六）六月条などに見える。「万病膏」「神明膏」は『延喜式』斎宮式に合薬剤として見えるが、詳細は不明。「受」は「授」の省画であろう。

(2)の「飛鳥寺」は木簡としては初見。表は「セムトイヒテ…」という万葉仮名の表記で、音仮名が大字と小字を併用している点が注目される。

(3)は糸の出納を記録した木簡であろう。「智調」は『日本霊異記』上巻二二縁によると、入唐僧の道昭が飛鳥寺の東南禅院で亡くなった際に、立ち会った弟子の一人として「知調」なる僧がおり、年代的にも一致するから彼と同一人であろう。

(4)は荷札木簡の一部で、貢進元は、後の播磨国揖保郡石見郷にあたる。『播磨国風土記』によれば、揖保の地名が「粒山」（イイボヤマ）に由来するという。

(6)は材を加工した際にできた木片に習書したものであろう。観勒は推古一〇年（六〇二）に百済から渡来した高僧で、暦本・天文地理書・遁甲方術書などを伝えた。その没年は不明であるが、木簡の年代である七世紀末からは数十年の開きがあるから、生前のものではなく、後代にかつての高僧の名を木片に記したのであろう。

(8)は、「南」から「葛城」にあてて、沙弥の派遣を要請したもので、召文木簡と同じく、差出から宛先を経て、差出に戻って廃棄されたと推定できる。「南」は「南院」、「葛城」は「葛城寺」の可能性が高い。

(10)の「冊心」とは菩薩が修行すべき五二の段階のうちの四〇の段階をいう。通常は、その一位から一〇位を十信、一一位から二〇位を十住、次いで十行、十廻向という。ここでは十住を十解、十行を十句とする。「怖魔」は比丘の別称。詳細はなお検討が必要である。

(11)の「□多心経」は般若波羅蜜多心経のこと。六四九年、唐の玄奘訳、一巻。したがって、この時期早くも同経が伝来していたことを示す。玄奘のもとで学んだ道昭が将来したと考えると、理解しやすい。

(12)は甘草、桂心など薬品名を列挙した木簡である。したがって、豆を加工したとされる豉もここでは薬品として利用されたものか。薬に関係する木簡としては、他に(1)の万病膏・神明膏、(34)の桑根白皮などがある。

(13)は完形であるが、廃棄の際に縦に三分割しようとした痕跡がある。これは同じく「次米」の木簡である(18)が縦に三つに割れているのと対応し、意図的な廃棄法であろう。後の美濃国土岐郡から貢進された次米の荷札木簡。恵奈五十戸造阿利麻が貢進責任者、服部枚布が米を舂いた者である。次米は「スキノコメ」であり、宮廷祭祀における米の貢進国悠紀・主基の主基に該当するであろう。『日本書紀』によれば、七世紀には大嘗祭のみならず、毎年行なわれる新

嘗祭でも悠紀・主基を卜定していたから、この木簡は天武六年（六七七）秋の新嘗祭のときのものと判断する。ただし、同年は一一月に同祭が行なわれたとする『書紀』との違いをどう解釈するのか、また⒅の木簡も同じ時のものとすると、異なる評にまたがって主基が卜定されたことになり、この点をどう理解するのかなど、若干課題が残る。「恵奈五十戸造」は官人の姓であろうが、官職名に由来する姓と見られ、サトの長を「サトノミヤツコ」と称していたことの名残であろう。また、恵那は八世紀に郡として分置されるが、このころには刀支（土岐）評に属していたと推定される。行政単位としての「国」および「五十戸」がいつまで遡るのかは、未確定の問題であるが、この木簡は「国」「五十戸」のいずれについても、年紀を伴う資料としては、現在最古のものである。

⒁は断片であるが、人名と年齢およびその区分を記している。大宝令以後の年齢区分では、六一歳から六五歳は「老丁」であるが、ここではそれを「老夫丁」とする。正倉院に現存する戸籍のうち、大宝二年の西海道の戸籍では、これを「老夫」とする。この木簡と併せ考えると、古くは「老夫」ないし「老夫丁」であったことを示すのかもしれない。

⒂の「金屑」は、『本草和名』では南北朝期の陶弘景の注に「生金」とも「金沙」とも言うことを引用し、和名は「コガネ」という。『倭名抄』では「コガネノスリクズ」という訓。したがって、砂金の可能性がある。この場合、表と関連付けて、工房に関わる木簡とみるべきであろう。

⒃も(2)と同じく、万葉仮名による文章の一部。表「トクト、サダメテ…」、裏「…ク、オモヘバ」と読むか。

⒄は飢者などに米を施行した際の記録木簡であろう。道性はその支給を担当した僧の名。裏面の文章の続き方は、下へではなく、左の行へと続く。空白の下も同様である。「受者」はこの場合、「サズクルモノ」の意か。

⒅は⒀と同じく「次米」の木簡である。加尓評は刀支評の西隣の評で、後の美濃国可児郡。「久々利」という里は『倭名抄』には見られないが、現在、岐阜県可児市に「久々利」の地名がのこっている。⒀とは出土遺構は異なるが、廃棄時の分割法などから見て、おそらく同時に両溝へ廃棄されたのであろう。

⒇は上部が残っていないので、木簡の機能が判然としないが、大和の寺を列挙したものであろう。春日部、矢口なども、他から類推すれば、地名にもとづく寺名とみてよい。文字としては、波若＝般若、瀆尻＝池尻、平君＝平群と読み替えてよかろう。それぞれをどこに比定するのか、それを踏まえてこの木簡の機能をどういうものと考えるべきか、など課題が多い。

(21)は銀の付札である。「一」は数字ではなく、半との区切りを示すものか。(22)から類推すると、「軽銀」は銀の種類ではなく、地名

を指し、軽市からもたらされた銀という意味であろう。

㉓の「益」は「鎰」の省画と見ると、経蔵のカギに付けられたキーホルダーである。上の穿孔に紐を通したのであろう。類例は平城京の二条大路木簡などにある。

㉔の「陽沐戸」は「湯沐戸」のこととみられる。裏は「調」のみで、現状では以下削り取った痕跡はない。湯沐は『日本書紀』に見える語句で、皇太子や皇后を資養する封戸のこと。律令制下では、東宮一年雑用料、中宮湯沐の名で引き継がれる。したがって、皇族に対して貢進された荷札木簡となる。㉕の下端は二次的切断である。

㉗は荷札木簡の一部で、後の丹波国何鹿郡高殿郷にあたる。「何鹿郡」（イカルガ）の古い表記として、藤原宮木簡に「伊干我評」、山垣遺跡木簡に「伊干我郡」（本誌第二〇号）という例がある。

㉜の「丙子」は年紀とすれば天武五年（六七六）にあたる。「鍬代」は祭祀遺物としてのクワシロのことか、もしくは鍬の代物として何らかの繊維製品に付したか。「机」は単位を示すが不詳。

㊱は僧侶名のみを記した札で、他に記述はなく、上に穿孔がある。類例がもう一点あるが、機能は不明である。

㊲は五言絶句の漢詩を記した木簡。一句と三句の「向」、二句と四句の「其上」「其下」が対句となっている。ただし、平仄の規則や脚韻を踏まないなど、破格の習作である。『懐風藻』によれば、わが国では天智朝頃から漢詩が盛んに作られたとされ、大友皇子の詩などを載せるが、木簡に漢詩を書いた例としては、平城京二条大路木簡などよりも古いものである。

㊳は下が折れている。何らかの出典にもとづく可能性もあるが、いまのところ不明である。天皇号の成立時期の問題に関わる木簡である。

㊴は三面に墨書がある。右辺は二次的削り。観世音経は法華経の観世音菩薩普門品の抄出で、全一巻。裏面は「子曰学」の部分から論語の一部を習書したものか。

㊵は上下両端が二次的切断、裏面は二次的に削られている。三面に墨書があり、本来は四面に文字があった可能性が高い。千字文を記した木簡である。表は千字文の第二三句、右側面は第一六句「菜重芥薑」の最後の文字と、第一七句の残画である。この間六句空いている。仮に本来の形が四角柱で、その各面に千字文が書写されていたとして、「天地玄黄」から一面に六句を割り付けると、「推位譲国」は第四面の五句目にあたり、右側面には第三面の五句目「海鹹河淡」がくる。そうすると、左側面は第一面の五句目「寒来暑往」が該当する。木簡に残る残画はわずかであるが、この語句をあてることも可能である。中国ではこのような多面体に書く木簡を「觚」と呼び、敦煌漢簡の中には『急就篇』を書いた例がある。この木簡もあるいは、そうした使われ方を参考にしているものかも知れない。

㊶の地名は後の宍粟郡安志郷にあたる。『播磨国風土記』によれ

ば、もと「酒加里」であったが、「山守里」をへて「安師里」となったという。この土坑からは他にも(42)など播磨国宍粟郡関係の荷札木簡がまとまって出土しているので、あるいは飛鳥寺と同国との関係を示すのかもしれない。

(44)に見える「熊羆」は動物名、「迺恋蔦」は植物名、「蜚尸」は鬼の名か。こうした二ないし三文字よりなる語句について、一つ一つの文字に漢字の音を注記したもので、注記の方法は二小字の音仮名か、もしくは一文字の類音で示している。「ナ」は「左」の、「皮」は「彼」の省画か。□はR音の語であろうが、釈読できない。今のところ類例がないものの、当時の発音および表記について重要な手がかりを与える木簡である。

第八四次調査出土木簡全体にわたる大きな特徴は、第一に寺院に関わる木簡が多数を占めるという点である。寺院名・僧侶名・僧侶の尊称を記す木簡が目につき、さらに仏教用語や経典名を記すものなどを含めるとかなりの点数にのぼり、しかもそうした特徴が遺構の違いにかかわらず見られるから、全体的に飛鳥寺関連の木簡という位置付けが可能であろう。その場合に、飛鳥寺の中でも特に東南禅院との関わりが深いように思われる。

東南禅院は七世紀後半に、道昭の住んだ場所である。道昭は、遣唐使に従って唐に渡り、膨大な経典の漢訳を行なっていた玄奘の下に弟子入りして修行を積み、多数の経典とともに帰国、飛鳥寺の東南の一郭に居を構えた。我が国の法相宗の祖とされ、また道昭将来の経典は奈良時代においても特に貴重なものとして、特別の扱いを受けていたことが知られる。

発掘地がちょうど飛鳥寺の寺域東南方に位置する点は、注目すべきである。従来の発掘成果によれば、寺域内の東南部に東南禅院跡と推定される遺構を検出し、そこからは禅院所用とみられる七世紀後半の瓦も出土しているから、発掘地は東南禅院の中心部ではなく、その附属施設があった場所ということになろうか。

特徴の第二に、工房に関わる木簡が含まれるという点が挙げられる。ここに掲げたものでは(21)(22)の銀の付札などで、点数は少ないが、南区から流入した木簡とみてよかろう。

第三に、これも点数は限られるが、皇室ないし宮廷に関わる木簡がある点が注目される。(13)(18)の「次米」、(24)の「陽沐」、(37)の「天皇」などがそれで、発掘遺構との関連は今のところ定かではない。あるいは、発掘地の西南に近接する浄御原宮との関連を考えるべきであろうか。

三　第九三次調査

南北溝ＳＤ〇一

(45)　・「丁丑年十

　　・「□□□　　(47)×(10)×4　081

溝SD〇一A

(46) ・官大夫
・□□　(91)×(14)×2　081

(47) 「鮑耳酢一斗」　179×17×3　051

南北大溝SD〇五

(48) 「〈五十戸調」　125×19×5　033

炭層

(49) 散□宮〔支カ〕　□　(179)×12×4　081

(50) 「〈丁亥年若佐小丹評　木津□〔アカ〕五十戸〈
秦人小□□□〔益二斗カ〕」　197×30×3　031

(51) ・「加□□□〔夜評カ〕」
・□□□佐□俵□〔波閉二カ〕」　138×(26)×4　081

(52) ・「〈賀賜評塞課ア里〈」
・「〈人蝮王ア斯非俵〈」　195×34×5　031

(53) ・「〈□□〔加夜〕評阿□□〔蘇里〕人　〈」
・「〈羅□〔曳カ〕連□□
□□□　□□□　廿三□〈」　166×32×4　031

(54) 「〈伊支須二斗」　120×25×5　032

(55) 「六」（釘の様、上面に墨書）　60×23×24　061

炭層下整地土

(56) ・「官大夫前白　田々連奴加　加須波□〔々カ〕鳥麻呂
久田□　小山乃□乃
・「□波田乃麻呂　安目　汙乃古
野西乃首麻呂　大人　□□ツ麻□□□□黒□　(257)×28×3　019

第九三次調査木簡のうち、(45)～(48)は北区、つまり第八四次調査と一連の遺構からの出土で、(49)以降は南区の工房付近から出土したものである。

(45)は同じ遺構の下流から出土した(13)などとの関連が考えられるが、断片のため断言できない。

(49)の「散支宮」は「佐紀宮」の可能性がある。佐紀宮とすれば、平城宮北方にあたり、『万葉集』八四番に長皇子（天武の子）の宮として見えるが、『万葉集』では奈良時代のこととされており、木簡の含まれる炭層の年代が問題となる。

(50)「丁亥年」は持統元年（六八七）にあたり、貢進元は後の若狭国大飯郡木津郷である。類例として、藤原宮木簡に「庚子年四月若佐国小丹生評木ツ里秦人申二斗」がある。

(51)〜(53)はいずれも後の備中国賀夜郡にあたる地からの荷札であろう。(52)の「賀賜」は「賀陽」のことと推定する。ただし、「塞課部里」の読みは問題で、「そがべ」もしくは「さかべ」であろうか。前者ならば郷里制下の地名として見える賀夜郡の「阿蘇郷宗部里」、後者ならば同郡の「刑部郷」などが該当する可能性も考えられる。

(56)および(46)には「官大夫」という語句があり注目される。ただし、これを直ちに天武朝の六官や大夫制のことと関連付けてよいかどうかは、木簡という史料の特性からみて慎重を期すべきであろう。(56)の内容は文書木簡で、人名を列挙したものであるが、人名にこれまで見られない姓が多い。遺構は炭層よりも古いので、天武朝ないしそれより遡る可能性もある。

第九三次調査の木簡の内容は、第八四次のそれとは大きく相違し、寺院との関係を示すものが見られない。総点数は少ないが、荷札と付札の比率が高いようである。特に備中国賀夜「評」関係のものがまとまっている点が目につく。炭層から出土した木簡はおそらく工房にもたらされ、そこで廃棄されたものであろう。工房を直接示す木簡としては、(55)の釘の形をした木製の様（ためし）に墨書したものなどがある。以前の一九九一年調査においても類例が出土しているが、木製の様は金属製品を注文する際の型見本であり、同型同大の鉄釘を六本作成するよう指示したのであろう。

9　関係文献

奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所年報一九九八―Ⅱ』（一九九八年）
同『奈良国立文化財研究所年報一九九九―Ⅱ』（一九九九年）
同『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報』一三（一九九八年）
同『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報』一四（一九九九年）

（寺崎保広）

奈良・飛鳥池東方遺跡

1 所在地　奈良県高市郡明日香村大字飛鳥字池ノ上・池ノ下
2 調査期間　第九二次調査　一九九八年（平10）四月～六月
3 発掘機関　奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部
4 調査担当者　代表　黒崎　直
5 遺跡の種類　流路跡
6 遺跡の年代　七世紀～平安時代
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

飛鳥池遺跡と一連の博物館建設に伴う調査である。遺跡は、飛鳥池遺跡の東側丘陵より東、飛鳥坐神社南の丘陵の南に位置し、北西から南東に遡る谷筋にあたる。一九九七年度（第八六次調査）に八ヵ所のトレンチを設定して調査を行ない、谷の西寄りを流れる旧流路SD〇一〇と谷中央東寄りで大規模な掘立柱建物、塀などを検出した。

第九二次調査では、対象を南に拡げて調査を行なった。発掘面積六〇四㎡。今回あらたに四棟の掘立柱建物、七条の掘立柱塀などを検出したが、最も注目されるのは、旧流路SD〇一〇の確認である。SD〇一〇は出土遺物からみて、七世紀中頃から平安時代まで存続しており、堆積土は大きく四時期に分けられる。溝の両肩を確認したトレンチはないが、地形との関係から溝幅が六～七mある大規模な溝であり、人工的な掘削が行なわれており、この周辺における基幹排水路の役割を果たしていたものと思われる。木簡はこの旧流路の下層から、一点が出土した。なお、この流路は酒船石遺跡東方からさらに岡寺方向まで遡り、下流は飛鳥坐神社の西側を北流してゆく。斉明紀の「狂心渠」との関係も指摘されるが、なお検討すべきであろう。

8 木簡の釈文・内容

(1) 「V煮物」　112×20×8　032

9 関係文献

奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所年報一九九九―Ⅱ』（一九九九年）
同『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報』一四（一九九九年）

（寺崎保広）

奈良・吉備池廃寺

1 所在地　奈良県桜井市吉備

2 調査期間　第三次調査　一九九九年（平11）一月～四月

3 発掘機関　奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部・桜井市教育委員会

4 調査担当者　代表　黒崎　直

5 遺跡の種類　寺院跡

6 遺跡の年代　七世紀

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

吉備池廃寺は、溜池「吉備池」の護岸工事に伴う一九九七年の調査によって発見された、七世紀中頃の寺院跡である。池の南岸に張り出すように二つの土壇が残っていたが、東の土壇は九七年の第一次調査により、東西三七ｍ南北約二八ｍという巨大な基壇であり、南面する金堂跡と判断した。西の土壇は翌年の第二次調査で、一辺三〇ｍ近い方形の基壇となり、その中央部に巨大な礎石抜き取り穴を確認したことなどから、これを塔跡と考えた。出土した軒瓦の年代と基壇規模および想定される伽藍の巨大さなどから、この寺院跡は舒明天皇が発願し六三九年から造営が始まったという「百済大寺」の可能性が高いと判断した。

（桜井・吉野山）

今回の第三次調査は、第二次調査で一部確認していた南面回廊と中門、および西面回廊の検出を目的として実施した。発掘面積は七二〇㎡である。

調査の結果、塔跡の南約五六ｍのところで基壇幅五・六ｍの南面回廊を検出したが、それは伽藍中軸線を越えて一直線に伸び、そこに中門は開かないことが明らかとなった。西面回廊は残りが悪いものの、その東雨落溝とみられる溝を検出したので、塔心より約四〇ｍ西の位置を回廊が通っていたと推定する。木簡は、西面回廊の西にある東西方向の溝から一点出土した。同溝は幅約二ｍ深さ〇・二ｍの素掘り溝で、藤原京期の須恵器などが伴出した。

8 木簡の釈文・内容

(1)　「□□」　(135)×19×4　019

9 関係文献

奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所年報一九九九―Ⅱ』（一九九九年）

（寺崎保広）

木簡研究第二〇号

巻頭言―機器の目・人の目―　和田　萃
一九九七年出土の木簡
概要　平城宮跡　平城京跡(1)　平城京跡(2)　青野遺跡　藤原宮跡　酒船石遺跡　長岡宮跡　長岡京跡左京二条四坊三町　長岡京跡右京六条二坊六町　平安京跡右京三条一坊三町　平等院庭園　細工谷遺跡　大坂城跡　天満本願寺跡　堺環濠都市遺跡　東浅香山遺跡　猪名庄遺跡　屋敷町遺跡　加都遺跡　明石城武家屋敷跡　境谷遺跡　茂利宮の西遺跡　安坂・城の堀遺跡　大将軍遺跡　大脇城跡　瀬名川遺跡　明治大学記念館前遺跡　千駄ヶ谷五丁目遺跡　山崎上ノ南遺跡B地点　西原遺跡　松本城三の丸跡小柳町　松本城下町跡伊勢町　三輪田遺跡　一本柳遺跡　志羅山遺跡　三条遺跡　上高田遺跡　山田遺跡　払田柵跡　大光寺新城跡遺跡　福井城跡　金石本町遺跡　戸水大西遺跡　堅田B遺跡　七尾城下町遺跡　蛇喰A遺跡　二口五反田遺跡　清水堂F遺跡　下ノ西遺跡　中倉遺跡　大御堂廃寺　三田谷I遺跡　有福寺遺跡　高田遺跡　百間川米田遺跡　津寺遺跡　末原窯跡群（灰原上層）　萩城跡（外堀地区）　高松城跡　観音寺遺跡　上長野A遺跡　香椎B遺跡　博多遺跡群　魚屋町遺跡
一九七七年以前出土の木簡（二〇）　藤原宮跡
釈文の訂正と追加（一）　山垣遺跡　袴狭遺跡（深田地区）　袴狭遺跡入佐川遺跡　出雲国庁跡
再び長屋王家木簡と皇親家令について　八木　充
長野特別研究集会の記録
信濃の古代と屋代遺跡群…寺内隆夫、七世紀の屋代木簡…傳田伊史、七世紀の地方木簡…鐘江宏之、七世紀の宮都木簡…鶴見泰寿、律令制の成立と木簡―七世紀の木簡をめぐって…舘野和己
書評　佐藤信著『日本古代の宮都と木簡』　仁藤敦史
新刊紹介　大庭脩編著『木簡―古代からのメッセージ―』　丸山裕美子

頒価　五五〇〇円　送料六〇〇円

京都・河守（こうもり）遺跡

1 所在地　京都府加佐郡大江町大字河守字角田ほか

2 調査期間　一九九七年（平9）一一月～一九九八年三月

3 発掘機関　大江町教育委員会

4 調査担当者　松本学博

5 遺跡の種類　条里制遺跡

6 遺跡の年代　平安時代初期

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

河守遺跡は、大江町の中心にある河守の街の東側に位置し、由良川左岸の標高九～一一mの沖積地にある。遺跡付近は旧丹後国加佐郡川守郷に属し、古来から丹波と丹後を結ぶ交通路の一つと思われる、大江山を越えて宮津へ至るルートの玄関口にあたる。

（大江山）

本遺跡は、条里制地割が現在の耕地地割に踏襲されている遺跡として認識されており、その耕地地割は東西南北の方向に沿ってほぼ一町方格の碁盤目状に区画されている。

調査は圃場整備事業に伴うものであり、調査の結果、現在の畦畔の真下かもしくはそれに平行して、部分的に板材や杭を用いて補強された砂利敷きの条里畦畔と思われる遺構を、東西約一五m、南北約七〇mにわたり検出した。

出土遺物は須恵器の杯身の破片が主であり、条里畦畔の中からは平安時代初期の須恵器の杯身が出土している。木簡一点は、条里畦畔脇の、八～九世紀の須恵器片を多く含む灰色粘質土層から出土した。

8 木簡の釈文・内容

(1)　津丸一段　　(157)×(29)×8　081

木簡は上下両端、左右両側面を欠損している。墨痕が薄く肉眼では判読しづらい。

9 関係文献

大江町教育委員会『大江町文化財調査報告書』第五集（一九九八年）

（松本学博）

大阪・長保寺遺跡

1　所在地　大阪府寝屋川市出雲町

2　調査期間　一九九二年度調査　一九九二年（平4）一二月～一九九三年三月

3　発掘機関　寝屋川市教育委員会

4　調査担当者　濱田延充

5　遺跡の種類　集落跡

6　遺跡の年代　古墳時代中期（五世紀）～室町時代（一五世紀）

7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

長保寺遺跡は、寝屋川市のほぼ中央部に位置する古墳時代～中世の集落遺跡で、標高約四mの低地に所在する。遺跡の中央で北から南に流れる、寝屋川の旧流路と推定される古墳時代～奈良時代の自然河川が検出されており、この河川が形成した自然堤防上に立地していると考えられる。

（大阪東北部）

今回紹介する木簡が出土した調査地（CBJ九二―四区）は、遺跡の南西部に位置する。旧水田耕土・床土層を除去した段階で、古墳時代中期～後期と中世（一二世紀～一五世紀）の複数の時期の集落に関連する、柱穴・井戸・溝などの多数の遺構が同一遺構面で検出されている。

木簡が出土したのは、調査区の東側で検出された、南北方向に流れる溝一である。溝一の南北は調査区外に続いており、また、東側の肩部は調査区外で未調査である。検出された長さは三〇m、幅三m深さ一・五mを測る。西側に隣接する調査区でも同規模の溝が検出されており、それを参考にすると、幅は四～五mに復原される。溝の埋土から出土した土器は一二～一五世紀に比定できるもので、瓦器・土師器・国産陶器のほか、中国製青磁・白磁が比較的多く認められる。この溝については、規模・出土遺物などから屋敷地（居館）に伴う堀と推定される。調査区の南東隅に堀が途切れる部分があり、ここが陸橋（入口）に比定される。

木簡は溝の底に近い下層の埋土から出土している。

8　木簡の釈文・内容

(1)　「　　不浄□」
奉□念佛頂尊□□羅尼一千□□□　　(419)×76×2　019
〔勝陀カ〕　〔遍之カ〕

頂部を山形に加工した材の一面に、文字が書かれている。墨痕は薄くなっているが、文字が隆起したように遺存しており、赤外線テレビより肉眼による観察の方が、文字の判読がしやすくなっている。「佛頂尊□□羅尼〔勝陀カ〕」は、「佛頂尊勝陀羅尼経」のことと考えられる。同様な祈念文をもった木簡として、「奉加持佛頂尊勝陀羅尼経一千遍砌也」と書かれた大阪府東大阪市西ノ辻遺跡出土品が知られる（本誌第七号）。

なお、文字の判読については、奈良国立文化財研究所の綾村宏・山下信一郎両氏にご教示いただいた。

9　関係文献

濱田延充「長保寺遺跡の発掘調査成果」（『大阪府下埋蔵文化財研究会（第二八回）資料』一九九三年）

（濱田延充）

大阪・溝咋（みぞくい）遺跡

1　所在地　大阪府茨木市学園町

2　調査期間　一九九五年（平7）三月～一九九六年二月

3　発掘機関　㈶大阪府文化財調査研究センター

4　調査担当者　合田幸美・伊藤　武・橋本亜希子

5　遺跡の種類　集落跡・水田跡

6　遺跡の年代　弥生時代中期～古墳時代後期、奈良時代、中世～近代

7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

（大阪東北部）

溝咋遺跡は、大阪府の北部に連なる北摂山地に端を発する安威川の左岸に位置し、調査地とその周辺には、淀川とその支流により形成された沖積地が広がる。調査地は浪商学園の跡地で、調査に入る段階では、市街化が進んだ住宅地に残された広大な空地であった。

溝咋遺跡の対岸、下流約三〇〇ｍのところには延喜式内社である溝咋神社が立地する。溝咋神社は『日本書紀』にも散見する三島溝咋耳命、玉櫛媛命、神武天皇の皇后とされる媛蹈鞴五十鈴媛命を祭神とする。調査地内には溝咋神社上の宮があったが、一九〇九年に下の宮であった現溝咋神社に合祀された。今回の調査で中世前半にまでさかのぼる上の宮の遺構が検出された。

溝咋遺跡では、このほか古墳時代前期を中心とする、弥生時代中期～古墳時代後期の集落と水田が検出され、両者を関連付けて考えることが可能である。弥生時代後期～古墳時代前期の遺物には、銅釧・小型倣製鏡・人面線刻土器の他、多くの外来系土器が含まれ、他地域との交流が盛んな集落の様相が想定される。奈良時代の遺物としては、上の宮の下層で平城Ⅲ期に位置付けられる一群の土器が、後述する河川一の東肩部下層から平城Ⅲ期に位置付けられる墨書土器が、それぞれ出土した。墨書土器は須恵器杯身であり、底部外面に「奈貼」の文字が残り、下半は欠損のため不明である。その他、河川一の西肩部下層から鈴が一点出土した。調査地中央に位置する上の宮以外の調査地では、中世以降近代までの水田遺構が検出された。

調査地中央では幅七～九ｍ深さ一～一・五ｍの南北に貫流する河川一を、一八五ｍにわたり検出した。堆積土は粗砂が主体であり、最下層には礫が堆積する。中世以降、溝を掘り直し、肩部を杭打ちと盛土により成形している。溝内からは、古墳時代～近世の遺物が

出土し、溝底からは人の頭蓋骨の一部が出土した。河川一は、条里の坪境の大溝であり、天坊幸彦氏の摂津三島郡条里の復原（「摂津三島郡の条里」『歴史地理』五四―三　一九二九年）によると、調査地周辺は島上郡と島下郡の郡境にあたり、調査地は島上郡一二条六里もしくは島下郡二条六里に比定される。

河川一は南端で幅がやや広がり、そのほぼ中央で堰が検出された。堰は直径約一〇㎝の丸太材を数十本打ち込んだもので、その南側には深さ七〇㎝の窪みがある。堰の北側では東へ折れる溝が複数条検出されており、堰は南流する水をこれらの溝に導水するための施設と考えられる。堰の丸太材にさかさまに引っかかった状態で、卒塔婆が一点出土した。墨書の内容などから、一四世紀のものと考えられる。

8　木簡の釈文・内容

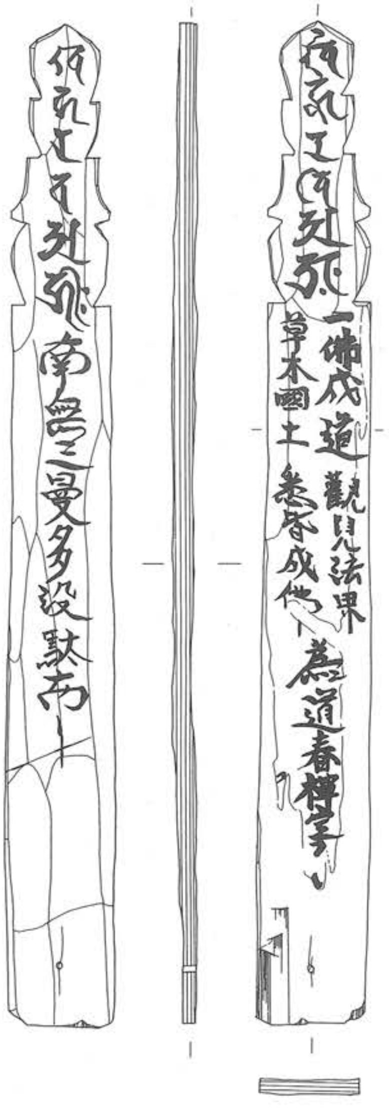
(1)
・「（梵字）一佛成道　観見法界
　　草木国土　悉皆成佛為道春禅定□
　　　　　　　　　　　　　　　　□　。」
・「（梵字）南無三曼多没駄南□　　　。」

303×33×7　061

「五輪塔形」で、下半部は調整によりやや薄くなるが、端末まで残存する。最下部中央に穿孔がある。

表面の梵字は胎蔵界大日真言の「(khaṃ huṃ ra vi a)」と虚空蔵菩薩の種子「(traḥ)」、裏面は四方五大種子の「(kha ha ra va a)」と阿弥陀如来の種子「(hriḥ)」である。

（合田幸美）



大阪・玉櫛（たまぐし）遺跡

1 所在地　大阪府茨木市玉櫛一丁目

2 調査期間　一九九五年度調査　一九九五年（平7）六月～一九九六年三月

3 発掘機関　㈶大阪府文化財調査研究センター

4 調査担当者　入江正則・川瀬貴子・木村建明

5 遺跡の種類　集落跡・水田跡

6 遺跡の年代　弥生時代後期～古墳時代、平安時代（一〇世紀後半）～中世（一五世紀）、近世

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

（大阪東北部）

玉櫛遺跡は大阪府の北部、茨木川と安威川により形成された沖積地に位置する。標高六・五m前後、対岸には銅鐸鋳型の出土で有名な東奈良遺跡がある。

一九九一・九二年度、大阪府教育委員会が府営住宅建て替えに際して、約五〇〇〇㎡を発掘調査した。その結果、古墳時代から近世までの水田・畑・河川・集落を検出し、玉櫛遺跡と命名した。一九九五年度から大阪府教育委員会の委託を受けて当センターが行なった調査では、平安時代前半から中世（一〇世紀後半～一五世紀）にいたる水田・集落・河川などを検出した。集落は数時期に分かれ、規模の大きい建物と小さい建物数棟で構成される。集落は場所を変えつつも連続しており、一五世紀には堀と呼べる規模の河川で区画され、出土遺物にも輸入陶磁などを多く含むことから、在地領主層の集落跡と考えられる。

木簡は三点出土した。(1)は畦畔が検出され、調査区で最古の水田面となる、一〇世紀後半から一一世紀前半までの耕作土層から出土した付札木簡である。他の二点は卒塔婆で、(2)は集落を区画する一五世紀の河川から出土した。この河川の同じ堆積層からは、五輪塔の水輪部も出土し、また河川岸には桶棺墓も検出されており、周辺一帯が墓域であったと想定される。(3)は集落内の一四世紀後半と推定される井戸から出土した。

8 木簡の釈文・内容

水田耕作土層

(1)　「V□□一石」　145×21×8　033

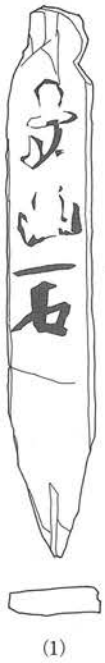
河川

(2)　「（梵字）南无阿弥陀佛右趣者為性　三七日追善×　(480)×56×3.5　061

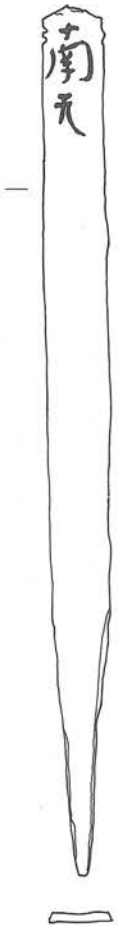
井戸

(3)　「南无□□□□」　328×24×3　061

(1)は上に二、三文字あるが判読できない。裏面は墨痕なし。下端を削り尖らせる。(2)は下端部欠損、裏面は墨痕なし。頭部に五輪塔状の切り込みが入り、左右も薄く削る。為性という人物の三七日追善供養の卒塔婆とわかる。(3)は「南无」以下にも文字があるが、肉眼では判読不能だが、吹田市教育委員会西本安秀氏の指摘では「南无多宝如来」という（同「木製卒塔婆の変遷と用途に関する一考察」『網干善教先生古稀記念考古学論集　下巻』一九九八年）。頭部に山形の切り込みがあり、先端も鋭く尖らせる。



(1)



(3)

(2)

9　関係文献

(財)大阪府文化財調査研究センター『玉櫛遺跡』（一九九八年）

（川瀬貴子）

兵庫・加都（かつ）遺跡

1 所在地　兵庫県朝来郡和田山町加都・市御堂

2 調査期間　一九九八年度調査　一九九八年（平10）六月～一九九九年二月

3 発掘機関　兵庫県教育委員会

4 調査担当者　西口圭介・岸本一宏・松野健児・甲斐昭光・井本有二・池田征弘・戸田真美子

5 遺跡の種類　集落跡・水田跡・道路跡

6 遺跡の年代　古墳時代前期～後期（四～六世紀）、奈良時代後期～平安時代前期（八～九世紀）、平安時代後期～鎌倉時代前期（一一～一三世紀）

（但馬竹田）

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

加都遺跡は、兵庫県北部の朝来郡和田山町の南部、円山川が形成した町内最大の流域平野の右岸に位置する。当地は、「加都千石」と通称される、整然とした南北方位の条里地割が広範囲にわたって遺存する田園地帯であった。

この加都平野の中央部に播但連絡道路北伸事業、北近畿豊岡自動車道建設事業に伴うインターチェンジが建設されるのに先立って、一九九七・九八年度に約四六〇〇〇㎡の発掘調査を行なった。その結果、古代末に形成されたであろう完新世段丘上から、一〇〇棟以上の竪穴住居などからなる古墳時代の集落と、それに近接する水田、律令期の計画的な直線古道、約六〇棟の掘立柱建物などからなる中世の集落などが検出された。

今回紹介する木簡は、古墳時代以降に集落が営まれる微高地の南側に広がる低湿地から出土したものである。三点のうち(1)は、新水北B地区の六世紀後半～九世紀の水田土壌層から、(2)(3)は宮ケ田C地区の古墳時代～中世以前の水田畦畔から、それぞれ出土した。

木簡(1)が出土した水田土壌（Ⅰa層）は、褐色腐植質シルトで、六世紀後半～九世紀の土器が含まれていたが、畦畔などを面的に検出することはできなかった。その上層には中世の土器を包含する水田土壌があり、Ⅰa層下層には洪水砂を挟んで六世紀前半の水田面が広がっており、畦畔などを検出できた。なお、畦畔では建築部材・用具部材・農具などを転用して補強材にしている。

(2)(3)は、古墳時代後期～中世以前に利用されていた水田畦畔中およびその近接地から出土した。この畦畔の補強のために用いられた

多量の礫・木杭・建築部材などが認められたが、(3)はこの補強材として転用されていたものである。なお、加都遺跡で検出された律令期の遺構は、官道と考えられる道路遺構のほかには、水田の畦畔のみである。

8　木簡の釈文・内容

新水北B地区

(1)　□長□〔田カ〕首床万呂之可承示日　(352)×39×4　081

宮ケ谷C地区

(2)　・　臣女一（墨線）大家マ酒刀自女一（墨線）阿刀マ嶋公一（墨線）鷹鷹鷹鷹藤藤藤藤家家家家家家勝勝勝郡郡郡郡長長長長長」

・□刀自女刀自女□　歳歳歳歳歳歳置置置置置□□□□□諷諷諷風□真□真□真□　」　(1226)×33×24　065

(3)「　〈　□□　右得鞆張継自女□□□〔偏カ〕□□□□□

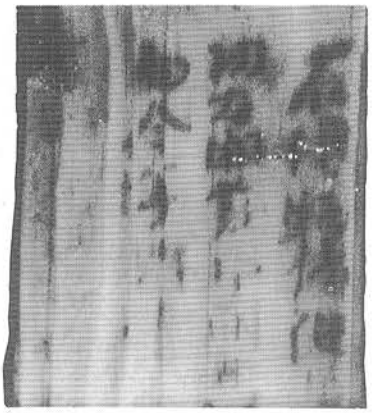
る。この他に、九六年度の確認調査で朝来郡山口里からの荷札が出土していること（本誌第二〇号）を考えあわせれば、近隣に古代の官衙的な遺跡が存在することも想定できる。

なお、木簡の釈読にあたっては、奈良国立文化財研究所の渡辺晃宏・山下信一郎氏のご教示を得た。

（岸本一宏・甲斐昭光）

(2)表冒頭部

(3)



(3)部分

木簡研究第一九号

巻頭言　町田　章

一九九六年出土の木簡

概要　平城宮跡　平城京跡　藤原宮跡　恭仁宮跡　長岡京跡　平安京跡　左京八条三坊十四町（八条院町）　末窯跡群　大坂城跡　広島藩大坂蔵屋敷跡　樟葉野田西遺跡　三条九ノ坪遺跡　大物遺跡　深田遺跡　安倉南遺跡　明石城跡坤櫓　明石城武家屋敷跡　袴狭遺跡　印場城跡　角江遺跡　御殿・二之宮遺跡　川合遺跡志保田地区　北条小町邸跡　伊興遺跡　丸の内三丁目遺跡　汐留遺跡　江戸城外堀跡牛込御門外橋詰　尾張藩上屋敷跡遺跡　青山学院構内遺跡　岡部条里遺跡　上山神社遺跡　湯ノ部遺跡　観音寺城下町遺跡　小谷城跡　高山城三之丸堀跡　松本城三の丸跡土居尻　松本城下町跡伊勢町　前橋城遺跡　大猿田遺跡　根岸遺跡　泉平舘跡　山王遺跡　舟場遺跡　無量光院跡　志羅山遺跡　後田遺跡　亀ケ崎城跡　宮ノ下遺跡　上高田遺跡　大楯遺跡　払田柵跡　長田南遺跡　金石本町遺跡　田尻遺跡　大坪遺跡　舞臺遺跡　馬寄遺跡　下町・坊城遺跡　新発田城跡　目久美遺跡　天神遺跡　三田谷Ⅰ遺跡　鴻の巣東遺跡　吉川元春館跡　長登銅山跡　飛田坂本遺跡　博多遺跡群　香椎B遺跡　鞠智城跡　前田遺跡　那覇港周辺遺跡群旧東村地区

一九七七年以前出土の木簡（一九）

美作国府跡

韓国出土の木簡について　李　成市

史料紹介　琉球の木簡二題　山里　純一

書評　山里純一著『沖縄の魔除けとまじない―フーフダ（符札）の研究―』　高島　英之

書評　東野治之著『長屋王家木簡の研究』　鶴見　泰寿

彙報

頒価　五五〇〇円　送料六〇〇円

兵庫・姫路駅周辺第四地点遺跡（仮称）

1 所在地　兵庫県姫路市朝日町・駅前町

2 調査期間　一九九八年（平10）八月～一九九九年三月

3 発掘機関　姫路市教育委員会

4 調査担当者　中川　猛

5 遺跡の種類　集落跡（平安時代後半）、城下町跡（江戸時代）、姫路駅駅舎跡（近代）

6 遺跡の年代　弥生時代前期前半～平安時代後半、江戸時代、近代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

（姫　路）

姫路駅周辺第四地点遺跡は、ほぼ姫路市の中心に位置し、JR姫路駅構内に所在する。遺跡は各時代にわたる複合遺跡である。遺跡周辺には市之郷遺跡、千代田遺跡、市之郷廃寺、播磨国府推定地である本町遺跡、姫路城跡などがある。調査

は姫路駅周辺土地区画整理事業に伴って、一九九四年度から実施している。これまでの調査の順に従い、各調査地点を第一～第四地点と仮称している。今回の調査面積は四六五〇㎡である。

木簡が出土したのは、第二遺構面と呼んでいる江戸時代の城下町の遺構からである。遺構は石組み溝で、調査区の北側に総延長約一八〇mを検出し、幅二m深さ三〇～五〇cmを測る。この石組み溝は姫路城跡の南部外堀の外側に、外堀に並行して計画的に造られたもので、一直線に東西に走っている。石組みは深いところでは、三段に積み重ねられている。溝内堆積土は上層と下層に分けられ、下層は出土遺物から一七世紀中頃まで遡ることができ、外堀の造られた時期（一七世紀前半）と若干時期差があるにしても、比較的早い段階から姫路城の外曲輪の一部を形成していたことが判明した。木簡が出土したのは石組み溝の上層からである。

8　木簡の釈文・内容

(1)

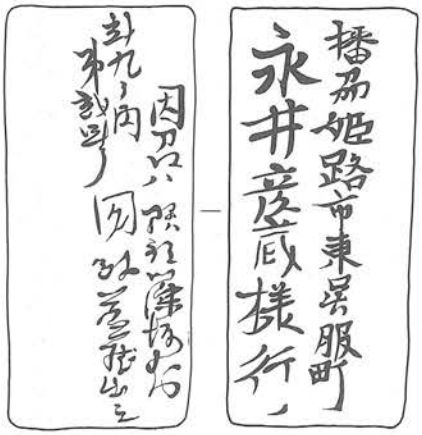
・「播州姫路市東呉服町
　永井彦蔵様行　」

・「　因州八頭郡篠坂村
　　弐九ノ内　第弐号　岡□藤□出之」　126×56×10　011

木簡は短冊型で、柾目材を使用している。「因州八頭郡篠坂村」は現在の鳥取県八頭郡智頭町大字篠坂にあたる。おそらく荷物の荷札として使用され、目的地である姫路に着いたのち廃棄されたものと思われる。「東呉服町」は、遺跡から北へ三〇〇mの姫路城外曲輪内に所在する。木簡の表に「姫路市」と記載があることから、市制が施行された一八八九年（明治二二）ころまで石組み溝が機能していたことが明らかとなった。

なお木簡の釈読にあたっては、兵庫県立歴史博物館の小林基伸氏のご教示を得た。

（中川　猛）



兵庫・古網干（ふるあぼし）遺跡

1 所在地　兵庫県姫路市網干区余子浜字古網干

2 調査期間　一九九八年度調査　一九九八年（平10）九月～一九九九年三月

3 発掘機関　姫路市教育委員会

4 調査担当者　森　恒裕・中川　猛

5 遺跡の種類　集落跡（港津）

6 遺跡の年代　一二世紀後半～一六世紀後半

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

古網干遺跡は、姫路市の西部を流れる、播磨の主要河川の一つである揖保川によって形成された自然堤防上に立地し、標高は概ね一mである。遺跡から河川に沿って約七km北へ行くと、福田片岡・福田天神・宝林寺北遺跡などが所在する。更に六km程北へ向かうと、嘉吉の乱で知られる城山城がある。古網干遺跡はこれらの遺跡のある、揖保川水系の出入口に所在する。また遺跡周辺には条里型地割がよく残っている。

調査は土地区画整理事業に伴って一九九七年度から実施し、道路予定部分の発掘調査を行なっている。試掘調査の結果によると、遺跡の範囲はほぼ字古網干地内に限られる。一五世紀代の遺構面を二面、一二世紀後半から一六世紀に至る包含層を五層確認した。検出した遺構は、掘立柱建物・井戸・溝状遺構・土坑・柱穴などである。いずれの遺構面、包含層からも遺物が大量に出土している。遺物は中国製陶磁器、国内各地の陶磁器などで構成され、在地の土器の占める割合が、搬入土器に比べて低いのが特徴である。遺跡の位置、遺物などから、港津に伴う集落と考えられる。また字名が示唆するように、現在の網干の前身の集落である可能性もある。

木簡は井戸SE〇一と三層の包含層から出土した。(1)～(9)は一五世紀中頃の第一遺構面から掘り込まれた、井戸SE〇一から出土した。SE〇一は調査区のほぼ中央に位置し、直径四mを測る円形の掘形をもつ。井側は円形縦板組で二段に構成され、涌水層に桶を置く構造である。井戸内の埋土は大きく三層に分けられる。遺構検出面から二〇cmの黄褐色土を経て、暗褐色粘土が約一m堆積し、暗青灰色の砂層に至る。

木簡が出土したのは、暗褐色粘土からである。木簡の他に箸状木製品・土師器・漆器・動植物遺存体・貝類などが大量に含まれてい

た。また木簡の削屑が一〇五点出土している。いずれも細片であるため、釈読できるものが少ない。一点のみ釈文をあげた。これらの遺物は、井戸の廃棄に伴うものと考えられる。但し、木簡(1)は黄褐色土と暗褐色土の境で、羽子板と共に検出されたことから、井戸の廃棄に伴う何らかの祭祀に用いられた可能性がある。他にほぼ同じ構造の井戸を二基確認した。

次に(10)～(19)は、五層目（黒色粘土）の包含層から出土した。明確な遺構面としては検出できなかったが、南北に三五m分溝状遺構を確認した。この溝状遺構は一二世紀後半の比較的短期間に形成されたもので、幅一m深さ約四〇cmを測る。出土した遺物はいずれもローリングを受けておらず、近辺から投げ込まれたものと考えられる。但し、本調査においては同一時期の遺構面を確認することはできなかった。また遺物の多くは火を受けた痕跡が見られる。木簡は埋土中から他の遺物とともに検出された。また墨書は認められないが、卒塔婆状に頭部を加工した木製品が八点出土した。

(20)は、上から二層目（黄褐色土）の包含層から、(21)は三層目（灰黄色土）の包含層から出土した。なお三層目の包含層からは、「□〔大カ〕」と書かれた墨書土器が出土している。また四層目（暗青灰色土）の包含層からは、底部外面に花押の書かれた須恵器椀が出土した。

8　木簡の釈文・内容

SE〇一

(1)　「〈吐〔マヽ〕天罡□□□□□〔急々如カ〕律令」　219×34×2.5　032

(2)　□出□　(18)×(48.5)×2　081

(3)　「□□」　128×16×11.2　011

(4)　「□□　□」　126.5×19×16.2　015

(5)　・「○三□〔百カ〕□」

・「○　□」（左側面）　96.2×19×13.1　011

(6)　・「三□　」

・「　□」　91.5×12.5×9.5　011

(7)　・「三百七□□　」

・「○　□　」（左側面）

・「　□」　102×13×11　015

(8)　・「□」

・「○□　」（左側面）　78.9×25.5×15　015

(9)　□六十五□　091

第五層（黒色粘土）溝状遺構

(10)「〈咄天咫□□□□□」　178×39×4.1　032

(11)□□□〔咫カ〕□□　□□□□□□□□」　(321)×(27)×2.5　061

(12)「〈南无大日如来　(150)×25×3.5　061

(13)「〈南无□〔大カ〕　(78)×23×3.9　061

(14)「〈南无大日如□〔来カ〕　(111)×26.9×2　061

(15)「〈南无□〔大カ〕　(178)×31×2　061

(16)「〈南□〔无カ〕　(89)×36×5　061

(17)「〈□□□□□□　(405.2)×33.5×15　061

(18)□□〔南无カ〕大日如来　(115)×36.5×11　061

(19)「〈□　(77)×24.3×4　039

第二包含層（黄褐色土）

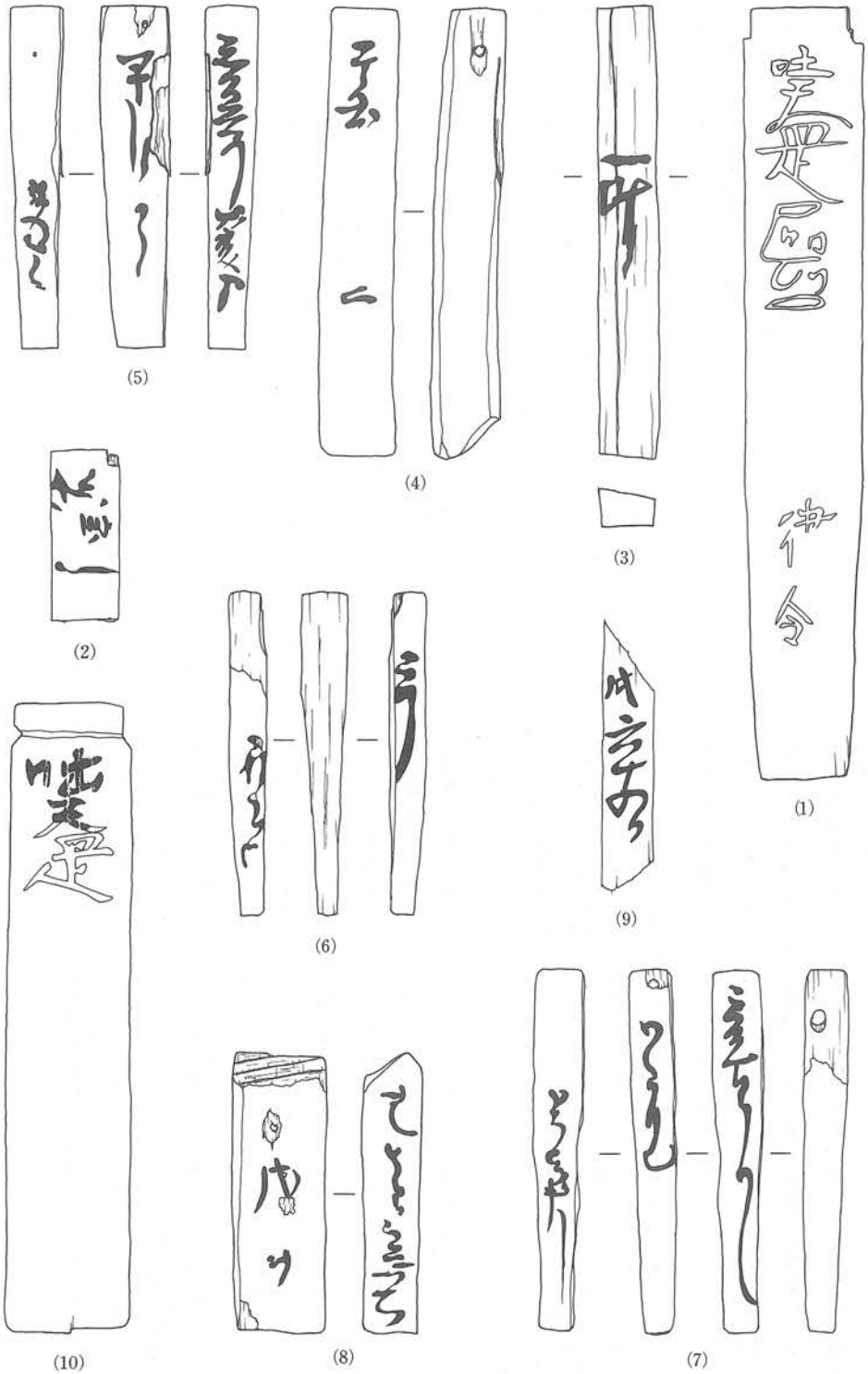
(20)□□　(13)×(20)×4.5　081

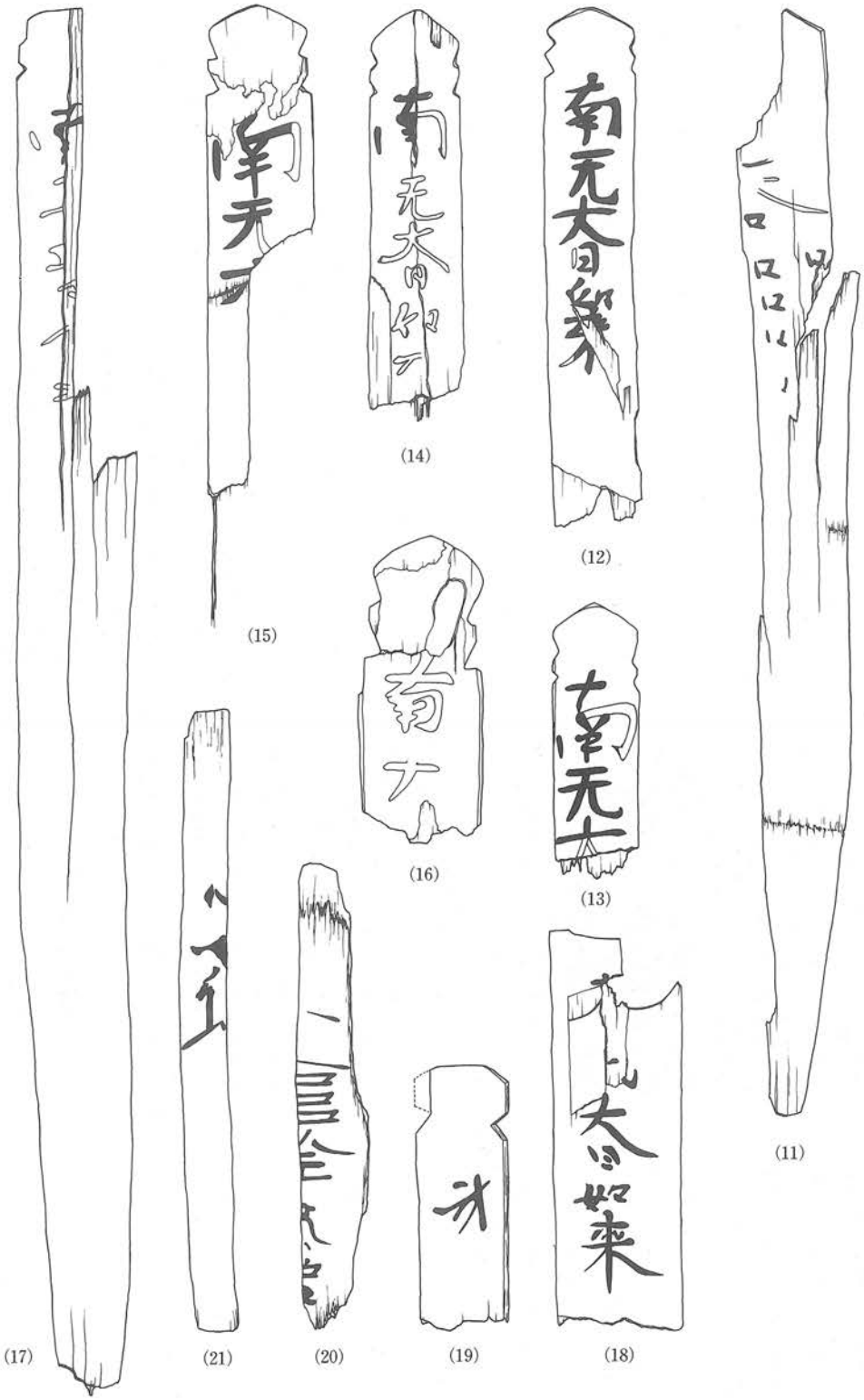
第三包含層（灰黄色土）

(21)「□□」　180×(13)×3　081

出土した木簡は全て柾目材を使用している。(1)は呪符木簡である。上端左右に切り込みがあり、文字部分が浮き上がっている。(2)は断片である。(3)～(8)は寸法が若干異なるが、材の形状は厚みのある直方体を呈している。(3)と(4)は墨書が薄く判読できない。(4)は下端を丸く削り出している。右側縁には僅かに面取りが施されている。(5)～(8)は文字の表記方法が似ており、多面に墨書が見られる。(6)以外は上端部に穿孔があり、全て材の頭部へ抜けるように斜めに穿たれている。(5)は更にもう一ヵ所極めて小さい穿孔が施されている。(6)は左側面を二次的に削り取っており、文字が半裁されている。(8)は頭部を山形に加工している。(4)～(8)は同様の用途に用いられたものと考えられる。

(10)は上端左右に切り込みを入れている。左右の切り込み線上に紐がまかれていた痕跡が残る。文字部分が浮き上がっている。(11)は上端を圭頭状に加工したものである。材の左側を約三分の一欠損している。(12)～(17)は上端を卒塔婆状に加工したもので、(17)以外はいずれも下半を欠損している。(17)は下端を若干欠損しているが、ほぼ全長を測ることができる。但し墨の残りが悪いため、文面が他と同一のものであるかは、不明である。(18)は上端、下端とも欠損のため、当初の形状を知ることはできないが、文面は他の卒塔婆状の木簡と同


(1)
(2)
(3)
(4)
(5)
(6)
(7)
(8)
(9)
(10)


(11)
(12)
(13)
(14)
(15)
(16)
(17)
(18)
(19)
(20)
(21)

様である。⑲は上端左右に切り込みを入れている。⑳は断片で、ほぼ半裁されているため判読はできなった。しかし、字体などから呪符である可能性が高い。㉑は右半分を欠損している。

釈読にあたっては、兵庫県立歴史博物館の小林基伸氏のご教示を得た。釈読は現在も継続中で、補訂の余地があることを申し添えておく。

（中川　猛）

三重・六大（ろくだい）A遺跡

1　所在地　三重県津市大里窪田町
2　調査期間　一九九五年（平7）四月～一九九六年三月
3　発掘機関　三重県埋蔵文化財センター
4　調査担当者　穂積裕昌・山本義浩
5　遺跡の種類　祭祀遺跡・河道跡・集落跡
6　遺跡の年代　弥生時代後期～中世（一六世紀）
7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

六大A遺跡は津市の北部、志登茂川右岸の標高四～一〇mの緩やかな丘陵斜面に立地する。遺跡から約五km下ると伊勢湾へ出られるが、地元の伝承によると、かつては河口から六大A遺跡付近まで舟で遡上することができたという。

（津西部・津東部）

志登茂川とその支流、毛無川の流域は、特に飛鳥時代以降に大規模に開発されたようで、国道二三号線中勢道路建設に伴って調査さ

れた大古曽遺跡・橋垣内遺跡・六大B遺跡・六大A遺跡や、県道建設に伴って調査された大垣内遺跡などで、多数の律令期の掘立柱建物が確認されている。特に六大A遺跡に南隣する六大B遺跡では、正方位を意識した大規模な掘立柱建物群が確認されるとともに、溝から八世紀後半の土器に伴って「□□十□年十月七日□前東人」と書かれた木簡が出土しており注目される（本誌第一五号）。これら遺跡群は、窪田遺跡群とでも総称しうるもので、旧伊勢国奄芸郡の中心地の一角と言うことができる。六大A遺跡は、これら遺跡群の北端に位置して水陸交通の要衝であったと言えよう。

今回紹介する二点の木簡は、調査区の中央部を縦断する大溝から出土したものである。大溝は、上流部で幅一五m深さ一m、下流部で幅三〇m深さ三m、調査区内での総延長約一〇〇mを測る大規模なもので、最下層に弥生時代後期の土器、最上層に中世の土器を包含する。大溝内部には、素掘りや石組みの井泉、貼石などが敷設されており、井泉や出土遺物の存在形態から、古墳時代を中心とした時期に祭祀が行なわれた痕跡が明瞭で、大形の土馬などの存在からこの祭祀行為は律令期にも継続していたようである。

木簡や土馬以外に注目できる律令期の遺物としては、獣脚付圏脚円面硯や円面硯、「嶋」「北」「大川」などの墨書土器、土管、緑釉陶器、隆平永宝、下駄などの木製品がある。

木簡の年代は、大溝出土資料という制約上、大雑把なことしか言えないが、I層からⅣ層に大きく分けられる堆積土中、(1)はⅡ層出土で飛鳥～平安時代、(2)は最上層のI層出土で中世ということになろう。

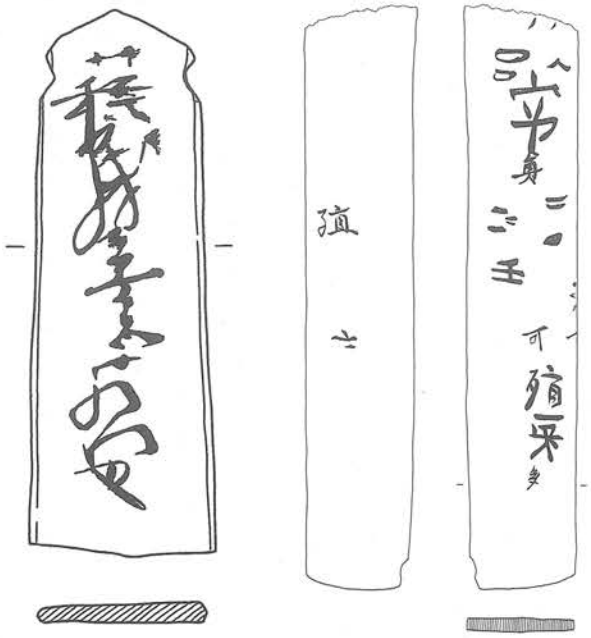
8　木簡の釈文・内容

(1)　・『□』真『□□壬』可□『殖□』多」
　　・　殖　□　」　(280)×(50)×5　061

(2)　「〈蘓民将来子孫門也」　87×30×3　032

(1)は曲物の底板を転用した材で、上端部及び側面を欠損する。文字は表裏に存在し、仮に文字数の多い方を表面とした場合、表面の文字の配列は、規則性に乏しく、また記号かとも思われる意味不明の墨痕も存在する。表面の「真」「可」「多」以外は線が太く、三字とは異筆であろう。その場合、字体の異なる「殖」が表裏に存在していることになる。記号状墨痕の存在から何らかの呪符とも思われるが、判読できない文字も多く、確定できない。

(2)はいわゆる蘇民将来札である。形状的にはほぼ原形を留めている。ただし墨痕は薄く、「将来子孫」の部分は極めて判読しづらい。なお、本例とは別に、本例と頭部の形状が共通するものの、墨書がない木簡状木製品が一点、Ⅱ層から出土している。　（穂積裕昌）



(2)　　(1)

三重・内垣外（うちがいとう）遺跡

1　所在地　三重県多気郡多気町相鹿瀬字内垣外

2　調査期間　一九九六年（平8）一一月～一九九七年三月

3　発掘機関　三重県埋蔵文化財センター

4　調査担当者　西出　孝・山田康博・前川明男

5　遺跡の種類　集落跡

6　遺跡の年代　下層　旧石器時代
　　上層　縄文時代、室町時代、江戸時代末期

7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

内垣外遺跡は、三重県中部を流れる宮川の中流域左岸の段丘中位面に立地し、標高は約四八mである。今回紹介する木簡は、室町時代の掘立柱建物・墓・井戸や、江戸時代の井戸・土坑・溝などが主となる上層の調査中に、井戸の底部から一点だけ出土したものである。井戸は計四基検出されているが、木簡が出土した井戸からは土器がほとんど出土せず、使用時期は不明である。他には井戸廃棄時に用いた、井戸内部の「息抜き」と現地で呼ばれる竹筒が、突き刺さった状態で出土している。

8　木簡の釈文・内容

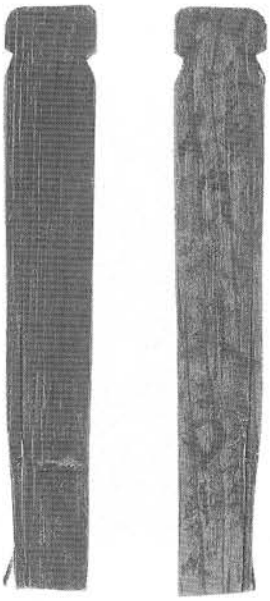
(1)　・「〈〈蘇民将来子徒也」
　　・「〈　　☆　」　226×36×6　032

檜板製の蘇民将来札である。下部に若干の欠損箇所と割れが認められるが、ほぼ原形を留めている。裏面下部にセーマンが記されている。

9　関係文献

三重県埋蔵文化財センター『内垣外遺跡発掘調査報告』（一九九七年）

（西出　孝）



神奈川・宇津宮辻子幕府跡

1　所在地　神奈川県鎌倉市小町二丁目
2　調査期間　一九九八年（平10）六月
3　発掘機関　宇津宮辻子幕府跡発掘調査団
4　調査担当者　原　廣志
5　遺跡の種類　官衙跡
6　遺跡の年代　中世（一三世紀～一四世紀前半）、近世
7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

遺跡は、ＪＲ鎌倉駅の北東方約四七〇ｍ、鶴岡八幡宮前面の若宮大路東側域で、中世鎌倉の中枢部に所在している。県遺跡台帳による「宇津宮辻子幕府跡」の範囲は、東西が若宮大路と小町大路に挟まれた地域で、南辺を宇津宮稲荷神社に至る露路、北辺を清川病院北側の道路とする、東西約一九〇ｍ南北一六〇ｍ余りの長方形区画である。調査地点はこのうち現小町大路に面した北東隅の一角に所在する。本遺跡北隣には執権北条泰時・時頼の正邸とも、若宮大路の幕府の所在地ともいわれる「北条小町邸跡」の遺跡が位置する。幕府は嘉禄元年（一二二五）泰時のとき、大倉（八幡宮東側・現清泉小学校付近）から宇津宮辻子に移り、その後、嘉禎二年（一二三六）に若宮大路「東頬」へ移転したのが若宮幕府である。

（横須賀）

中世の遺構は、道路・溝・井戸・土留状遺構などである。特に鎌倉時代前期～末期にかけての小町大路の西側溝にあたる木組・薬研形の溝（溝一・三・四）と、鎌倉時代後期の木組南北溝（溝二）が宇津宮辻子幕府跡と推定される地域において初めて確認された。木簡の出土した溝二は、現小町大路の西約一二ｍに位置する若宮大路と平行した木組構造で、規模は幅二・一ｍ深さ一ｍ以上を測り、土台や束柱などの木材が良好な状態で確認された。木簡はこの溝底から出土したものである。溝二は方向や規模、その時期からみて、若宮大路御所（幕府）または北条小町邸の外郭溝（堀）の一部である可能性がある。

8　木簡の釈文・内容

(1)　303×50×6　011

「三丈　□〔セカ〕きのやまの□宗□〔近カ〕。」

文字は二行書きで左行下部に釘穴らしき小孔があり、そのために

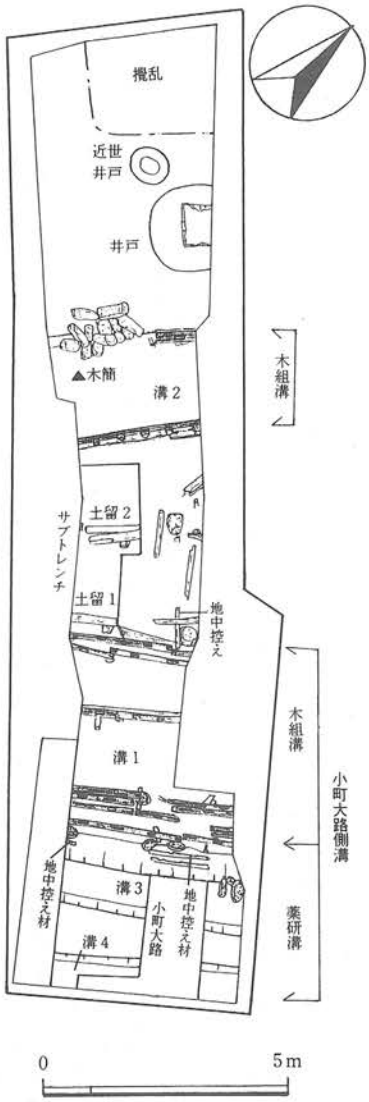
表面が荒れて墨痕が薄くなり判読しづらい。

この木簡は長さと人名を記しているが、若宮大路両側溝の出土例（本誌第七・一八・一九号）と同じく、溝の普請を幕府が御家人たちに課役（御家人役）として割り当てた工事区間の表示札と推定され、若宮大路以外で発見されたのは本例が初めてである。そしてそれらの事例から判断すると、当初は上端と左右両側面を削って調整し一端を尖らせた形態であり、下端の刃（鋸か）を入れた切断痕は二次的なものと考えられる。樹種は杉である。

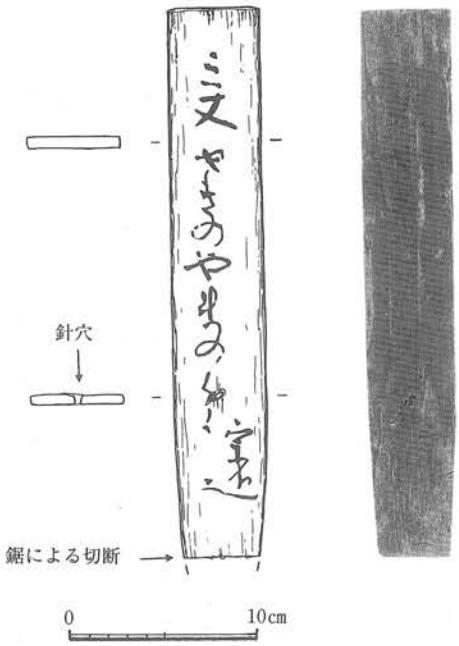
9　関係文献

神奈川県考古学会「鎌倉市宇津宮辻子幕府跡」（『第三二回神奈川県遺跡調査・研究発表会　発表要旨』一九九八年）

（原　廣志）



遺構図



木簡研究第一八号

巻頭言―簡牘研究の今昔―　永田英正

一九九五年出土の木簡

概要　平城宮跡　平城京跡左京三条一坊十五坪　平城京跡　興福寺旧境内　大乗院庭園　藤原宮跡　藤原京跡　飛鳥京跡　長岡宮跡　長岡京跡(1)　長岡京跡(2)　平安宮内酒殿・釜所・侍従所跡　大坂城跡　大坂城下町跡　森の宮遺跡　長原遺跡　四天王寺旧境内遺跡　長曽根遺跡　入佐川遺跡　宮内堀脇遺跡　祢布ヶ森遺跡　香住ヱノ田遺跡　神戸大学医学部附属病院構内遺跡　大毛池田遺跡　駿府城三の丸跡　駿府城跡　御所之内遺跡　韮山反射炉　大師東丹保遺跡　甲府城関係遺跡　居村B遺跡　北条小町邸跡　宮町遺跡　南滋賀遺跡　西河原森ノ内遺跡　屋代遺跡群　大猿田遺跡　山王遺跡　市川橋遺跡　大日南遺跡　志羅山遺跡　西太郎丸遺跡　磯部カンダ遺跡　横江荘遺跡　加茂遺跡　豊田大塚遺跡　宮町遺跡　五社遺跡　寺町遺跡　佐渡金山遺跡佐渡奉行所跡　桂見遺跡　岩吉遺跡　米子城跡　八遺跡　山崎一号遺跡　長登銅山跡　小倉城跡　大宰府条坊跡　呉服町遺跡　松崎遺跡　下林遺跡Ⅳ区　昌明寺遺跡

一九七七年以前出土の木簡（一八）

塩田城跡　B・J・ヤニン

ノヴゴロド白樺文書　森　公章

長屋王家木簡三題　鈴木　景二

算木と古代実務官人　大隅　清陽

書評　沖森卓也・佐藤信著『上代木簡資料集成』

彙報

頒価　五五〇〇円　送料六〇〇円

東京・池之端七軒町遺跡

1 所在地　東京都台東区池之端二丁目
2 調査期間　一九九三年（平5）八月～一九九四年三月
3 発掘機関　台東区池之端七軒町遺跡調査会
4 調査担当者　加藤晋平・小俣　悟
5 遺跡の種類　寺院跡
6 遺跡の年代　江戸時代
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

池之端七軒町遺跡は台東区の西端にあり、武蔵野台地東側上野台と本郷台の間の根津谷に位置し、不忍池の北西の緩斜面上に立地する。今回の調査は警視庁上野寮建設に伴うものである。

（東京東北部）

当地周辺は近世以前には池に面した湿地が広がっていたものと思われ、江戸時代に整地されて町屋が成立したものである。当地には寛永四年（一六七二）建立の曹洞宗慶安寺が所在していたが、大正年間に杉並区に移転し現存している。周囲には東隣に下野喜連川藩足利家上屋敷、北側には富山藩前田家中屋敷などが存在していた。慶安寺に関する記録には、文政二年（一八一九）頃編纂の『御府内備考続篇』、明治一〇年（一八七七）発刊の『寺院明細簿―曹洞宗』があり、各々境内図を掲載している。

検出遺構は、伽藍を構成する建物の基礎、井戸と繋がる竹樋を有する小溝、廃棄坑、墓坑、地業としての整地層である。主要な建物基礎は敷地西側と中央南側で検出され、境内図と対比すると「庫裏」と「本堂」に対応する。墓域は南側に広がっている。低地に形成された遺跡のため木製品・木材などが良好に遺存している。

墓域は南東部と南西部の主に二地点に分かれ、大まかに四期に区分される。Ⅰ期が一七世紀末～一八世紀初頭、Ⅱ期が一八世紀前半、Ⅲ期が一八世紀後半、Ⅳ期が一八世紀末～一九世紀後半と推定され、Ⅰ期は南西部を中心とし、Ⅱ期に南東部にも広がり、Ⅲ期には南西部が断絶し、Ⅳ期が北側へと広がる。埋葬形態としては、土葬の場合、甕棺・方形木棺・円形木棺（早桶）などがあり、火葬では陶磁器・土器などの蔵骨器が見られる。

埋葬施設からの出土遺物は多量であり、しかも木製品も多いために未整理のものもあり、今回紹介できるのは報告書に掲載したものと、紹介したものの詳細は未掲載の墓誌一点（20）のみである。この他に多数の木製塔婆などの墨書が出土している。なお今回、報告

書掲載分のものについて、一部釈文などを改めたところがある。

8　木簡の釈文・内容

三六八号遺構

(1)　「玉将」　35×28×9　061

(2)　「金将」　31×26×10　061

(3)　・「銀将」
　　・「金　」　27×26×8　061

(4)　・「飛車」
　　・「龍王」　32×27×10　061

(5)　・「角行」
　　・「龍馬」　33×29×10　061

(6)　・「桂馬」
　　・「金　」　28×26×9　061

(7)　・「香車」
　　・「金　」　28×21×8　061

(8)　・「歩兵」
　　・「と　」　26×20×7　061

五四七号遺構

(9)　・「□□□□□□□□」（側面）
　　・「三斗六升入　　」（底面）　上径500×下径430×高530　061

四五七号遺構

(10)　「十方佛土中□□〔立カ〕
　　□□□□〔来カ〕裂　」　径610×厚20　061

六〇四号遺構

(11)　・「　　前」
　　・「慶寿院積室妙善比丘尼
　　寛政八丙辰年七月
　　□□□□下尅終　」
　　〔廿三カ〕〔辰之カ〕　径495×厚10　061

六四六号遺構

(12)　・「〈宝永八辛卯天　江戸本郷追分町
　　○　奉順礼秩父三十四所同行七人
　　〉四月吉祥　中山氏妻女　」
　　・「○　南無阿弥陀佛　」　158×40×2　011

五二二号遺構

(13)　「前」　径540×厚30　061

(3)

(2)

(1)

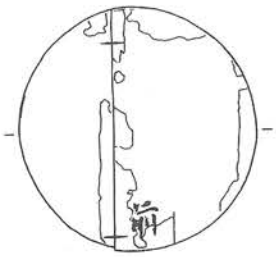
(6)

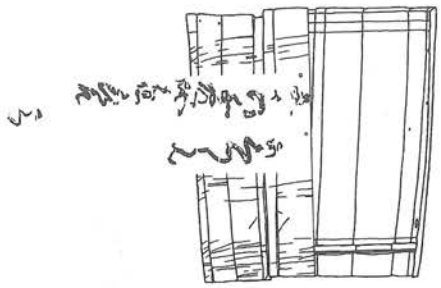
(5)

(4)

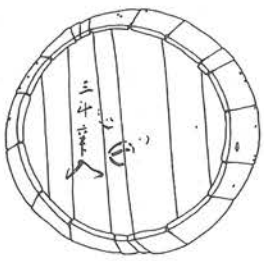
(8)

(7)



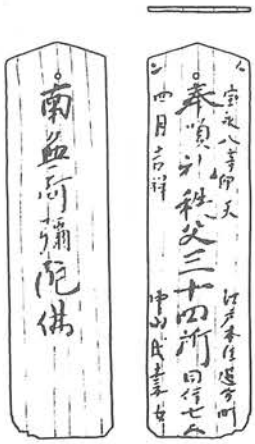


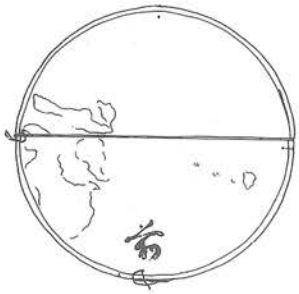
(11)


(9)

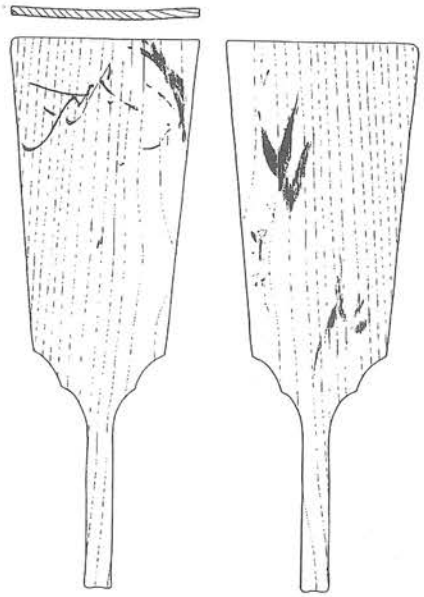
(17)

(10)

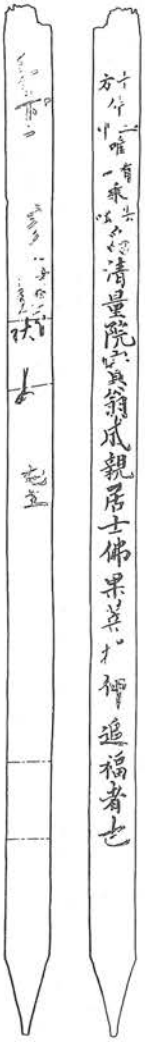

(12)



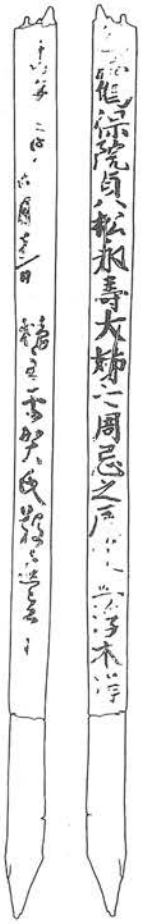
(13)



(19)

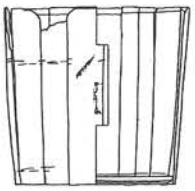


(14)



(15)

(16)



(18)

(20)

(14)
・「十□二唯有□□
方□一□□
□〔六カ〕
□□□□
□□□□
・□下□□□施主□□
□□□□
為清量院宝翁成親居士佛果菩□〔提カ〕伸追福者也」
1648×72×8　061

(15)
・□□保院貞松永寿大姉七周忌之□□浮木□」
・□□六月十三日　施主平賀氏□□」
(1444)×62×8　061

(16)
□□光院玄室□□大□〔姉カ〕三□□□□〔周忌之カ〕高顕□」
(1312)×70×10　061

六四〇号遺構

(17)
「　　」
61×25×2　011

五四一号遺構

(18)
「□」
上径360×下径310×高350　061

六〇七号遺構

(19)
「□□□」
363×120×10　061

遺構外

(20)
「×□院道積成基居士
十一月十三日
俗称
四代目□□□□×　」
径673×厚24　061

(1)～(8)は長方形木棺の副葬品で、方形の木製駒入れに入った将棋の駒一組分。他にキセルなどがあり、被葬者は男性と推測される。

(9)は円形木棺に転用されていた桶で、側面と底面に墨書を有し、また底面には焼印も見える。底面の墨書「三斗六升入」から本来は酒か醤油の樽と推測される。

(10)は円形木棺の木蓋。櫛などが副葬され被葬者は女性と推測される。(11)は甕棺の木蓋。表面に埋葬方向である「前」、裏面に墓誌が墨書されている。内容は妙善比丘尼が寛政八年（一七九六）七月（廿三日か）に死亡したということである。副葬品に扇の木製柄があり、副葬品からも被葬者は女性と判断される。

(12)は円形木棺の副葬品で巡礼札である。「宝永八辛卯天」の「天」は「年」のことであり、宝永八年（一七一一）に本郷追分町（現・東京都文京区本郷）の中山氏妻女が秩父巡礼に行った時のものであろう。他の副葬品に櫛があり、被葬者は女性と推定され、「中山氏妻女」に該当しよう。巡礼札が副葬されていることからあえて推測す

れば、被葬者は巡礼前後に死亡したとも考えられる。

⒀は甕棺の木蓋で、⒁～⒃はその方形木槨に転用された木製塔婆である。⒂は七周忌の追善供養のためで、⒃はかなり不明瞭であるが、三周忌の追善供養と推測される。副葬品に櫛があり、墓誌からも被葬者は女性と判断される。

⒄は甕棺の副葬品である木札に梵字を墨書したものである。上段に「bhai（薬師如来）」、右に「hrih（阿弥陀如来）」、左に「a（大日如来・弥勒菩薩か）」を書く。副葬品に櫛があり、被葬者は女性と推定される。⒅は円形木棺に転用されたと推測される桶の側面に墨書したもの。⒆は方形木棺の副葬品である羽子板に墨書しており、被葬者は女性と推定される。⒇は木蓋に墓誌が墨書されている。工事立ち会いにより出土したもので、埋葬形態などは不明であるが、近接して出土した石蓋が、その墓誌から同一の埋葬施設に使用されたものと推測されるため、甕棺の蓋と判断される。

人名を記しているのが⑾⒇の墓誌、⒁⒂⒃の木製塔婆、⑿の巡礼札であり、⒆の墨書も女性名と推測されるが不明である。

⒇の被葬者は、石蓋の墓誌「誠泰院安政五戊午歳十一月十三日卒　俗称　都筑十左衛門成基」から、本名を「都筑十左衛門成基」といい、「成基」を戒名としても使用している。また五二二号遺構の被葬者も、甕棺の石蓋の墓誌「都筑家六代十左衛門妻　瓊臺院　文久二戊年　七月六日」から都筑氏である。慶安寺檀家の「都筑氏」は、徳川幕府の御家人として江戸町奉行の与力職の家柄で、近年その子孫から「過去帳」などの史料が江戸東京博物館に寄贈された。「過去帳」などからは都筑氏が名前に「成」を通字としていることがわかる。⒁の「成親」は戒名であるが、⒇から類推すると、「成親」が元来本名である可能性が高く、「成」を有することから都筑氏一族の人物と推測される。よって同じ五二二号遺構に使用されている⒂⒃の供養対象者も、都筑氏一族と思われ、成人女性であるからおそらく嫁であろう。⒂の裏面に見える施主の「平賀氏」が実家とも推測される。

また⑾の墓誌は都筑氏の「過去帳」に見える「慶寿院積室妙善比丘尼　寛政八丙辰年七月　御俗名芳子小笠原長道妻幷幻影童子之母」に一致し、この被葬者も都筑氏一族と判断される。ちなみに⑾の六〇四号遺構は、五二二号遺構に近接している。

9　関係文献

台東区池之端七軒町遺跡調査会『池之端七軒町遺跡調査報告書（慶安寺跡）』（一九九七年）

台東区池之端七軒町遺跡調査団（小俣　悟・里見雅仁）「近世寺院跡の調査」『季刊考古学』五三（一九九五年）

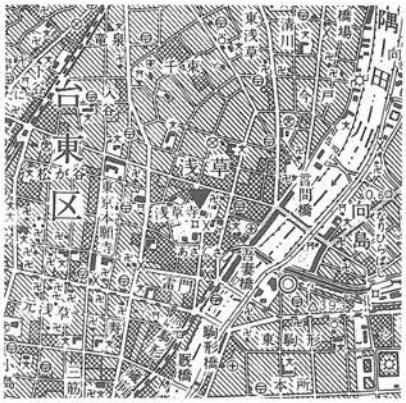
小俣　悟「池之端七軒町遺跡」『江戸遺跡研究会第九回発表要旨　江戸時代の墓と葬制』（一九九六年）

（小俣　悟）

東京・浅草寺遺跡

1 所在地　東京都台東区浅草二丁目
2 調査期間　一九九三年（平5）八月～九月
3 発掘機関　台東区文化財調査会
4 調査担当者　小俣　悟
5 遺跡の種類　集落跡・寺院跡
6 遺跡の年代　古代～近世
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

浅草寺遺跡は、武蔵野台地の東縁に広がる東京湾奥の沖積平野（東京低地）に立地し、当地東方には隅田川（旧入間川）が南流しており、隅田川の西岸には微高地（自然堤防）が南北に形成されている。その微高地が最も広がり、最高所となる地点に本遺跡が位置する。



（東京東北部）

当地には早くから浅草寺が所在している。浅草寺の縁起によれば推古天皇三六年（六二八）に起源があるが、瓦を葺く本格的伽藍が出現するのは、平安時代後期～鎌倉時代初期頃と推定される。

今までに本堂・五重塔再建に際し、確認・発掘調査が行なわれているが、今回は本堂西側整備工事に伴う発掘調査であり、影向堂新築地点を主に調査した。その結果、古代の溝・土坑、中世の土坑・ピット・蔵骨器埋納遺構、近世の土坑・池などが検出されている。また本堂西側には近世から池に囲まれた淡島堂が所在し、六角形の東京都有形文化財六角堂などが配されていた。

整備工事に伴い六角堂などを移動することとなり、その際六角堂の基礎の石組みを確認した。六角堂の下には「井戸」があるという伝承があるが、石組みは切石を六角形に積み、底面にも敷石されていた。その石組み基礎の中には多量の人形・針・古銭・木製品、それに木簡などが廃棄されていた。淡島堂では針供養などが行なわれたので、六角堂の出土遺物はそれに関連するものと思われる。ちなみに遺物の年代はほぼ一七世紀後半～一八世紀前半にまとまる。

なお当調査は現在整理中であり、墨書の釈文などは今後変更もあり得る。また未整理の墨書遺物もあり、本稿は今の時点で判明している状況の報告にすぎない。

8　木簡の釈文・内容

(1)
「（梵字）
○□　奉納坂東□□
□□□天□□□月」
158×38×2　011

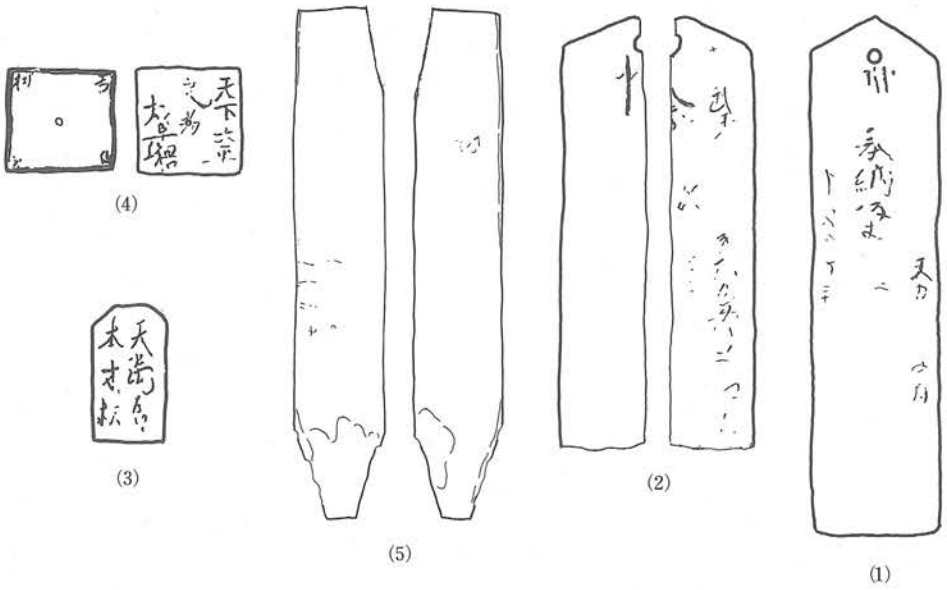
(2)
・「○武□[州カ]□□□□」
・「○□」
132×(25)×2　081

(3)
「天満□
本木□[板カ]」
41×21×6　022

(4)
・「天下太平
之為○
□□」
・「寿　仙
柳　○　□」
32×31×3　021

(5)
・「□　」
・「□□□□
□□□□」
512×(88)×9　061

(1)は奉納札であり、坂東三三ヵ所巡礼用と推測される。「天□」が年号とすれば、共伴遺物の年代から「天和」（一六八一～八四年）



と思われる。ちなみに浅草寺は坂東札所第一三番目である。

(2)も奉納札であり、縦に半截され左半分は欠損している。(3)は上部を圭頭状にした木札である。(4)は方形の木札であり、中央に穿孔が見られる。裏面は縁に墨が塗られている。

(5)は板塔婆に転用された板材で、両面に墨書が見られるが、裏面とした四行分はかなり薄く、表の一字分（？）が転用後の墨書と推定される。当初の用途は不明であるが、四行分の墨書がある面が本来の表側と思われる。

9　関係文献

台東区教育委員会『台東区の遺跡』（一九九五年）

小俣悟「台東区の遺跡―概要と最近の調査について」『武蔵野』七四―二（一九九五年）

（小俣　悟）

紫香楽宮跡調査委員会編　信楽町教育委員会発行

『宮町遺跡出土木簡概報』一　の刊行

「皇后宮職」「金光明寺」と書かれた木簡や、参河・遠江・駿河・伊豆・近江・越前などの諸国の荷札木簡が出土し、紫香楽宮跡であることが確実になった滋賀県信楽町宮町遺跡出土の木簡の概報が刊行された。今回は宮町遺跡で初めて木簡が出土した一九八六年度の第四次調査から、一九九七年度の第一二次調査出土分までを収録する。既に『木簡研究』などで報告済みの木簡についても、今回再度釈読を行い、最新の成果を収録する。今後も続刊の予定。

A四版　三二頁　写真図版三葉　一九九九年一二月刊行

頒価一〇〇〇円（送料込み）

問い合わせ先

信楽町教育委員会宮町遺跡調査事務所　鈴木良章氏

電話　〇七四八―八三―一九一九（FAX兼用）

東京・上千葉（かみちば）遺跡

1　所在地　東京都葛飾区西亀有一丁目
2　調査期間　一九九三年（平5）三月～八月
3　発掘機関　葛飾区遺跡調査会
4　調査担当者　江上智恵
5　遺跡の種類　集落跡
6　遺跡の年代　中世～近世
7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

上千葉遺跡は東京都東部の、下総台地と武蔵野台地とに挟まれた東京低地と呼ばれる沖積低地の微高地上に立地する。

（東京東北部）

本調査では一六世紀の建物や水田、一六世紀後葉から一七世紀前葉にかけての溝で区画された屋敷、一八世紀以降の溝状遺構などが検出されている。

木簡が出土したのは屋敷に関連する一七号溝で、区画溝と考えられる。幅は二・八～三・六m深さは〇・八～一・二mを測る。この遺構では一七世紀前葉の瀬戸・美濃陶器が出土しており、木簡もこの時期のものと思われる。

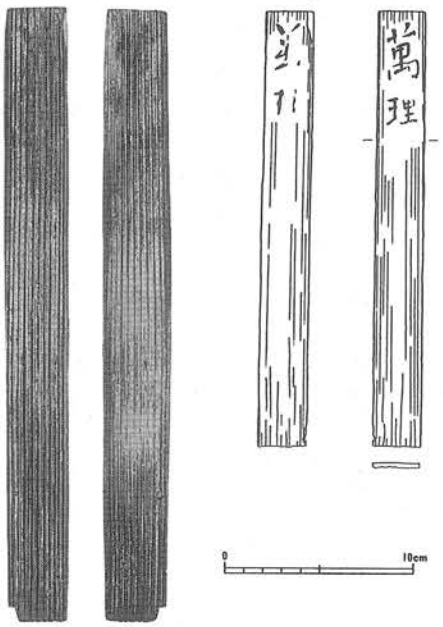
8　木簡の釈文・内容

(1)　237×25×3　011

・「萬理」
　〔萬理カ〕
・「□□」

両面に墨書されており、いずれも「萬理」の二文字とみられるが、これが何を意味するものかは不明である。

（永越信吾）



滋賀・尾上浜遺跡

1 所在地　滋賀県東浅井郡湖北町尾上

2 調査期間　一九八九年（平1）一〇月～一九九〇年一二月

3 発掘機関　滋賀県教育委員会・㈶滋賀県文化財保護協会

4 調査担当者　小竹森直子

5 遺跡の種類　遺物包含層

6 遺跡の年代　縄文時代～近世

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

尾上浜遺跡は、琵琶湖北東部沿岸の湖北町尾上地先に所在し、湖岸から湖中にかけて拡がる。対岸には葛籠尾崎・竹生島が位置し、北東には古保利古墳群・山本山城を望む。調査地は旧余呉川の河口部にあたり、河川による土砂堆積によって地形が形成されている。

（竹生島）

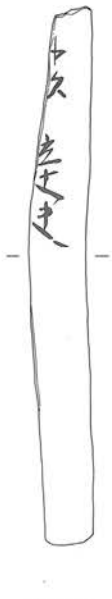
調査は湖岸堤取付工事に先立ち、湖中に三ヵ所の調査区を設定し実施した。その結果、縄文時代から近世に至る遺物の包含層及び流路などが確認された。現在、報告書刊行に向けての整理作業中で、遺跡の形成過程・内容などについては検討中である。現時点での特記事項としては、縄文時代後期頃のものと考えられる丸木船がほぼ完形で検出されたことがあげられる。

調査区内では最下遺溝面までに約二・五mの堆積が認められた。遺物は各層から出土しているが、木簡は最下遺溝面から約一・五m上位の砂礫層から出土した。文字の残存状況は良好ではなく、木簡の時期についても、現時点では判断できない。

8 木簡の釈文・内容

(1)　□□　□〔立カ〕□□　(212)×(22)×3.5　081

左側面については文字の残存状況から欠損していることが判明しているが、上下端は摩耗が顕著であることから即断しかねる。



9 関係文献

滋賀県教育委員会・㈶滋賀県文化財保護協会『文化財調査出土遺物仮収納保管業務　平成元年度発掘調査概要』（一九九〇年）

（松室孝樹）

長野・榎田（えのきだ）遺跡

1 所在地　長野市若穂綿内
2 調査期間　一九八九年（平1）四月～一九九二年一二月
3 発掘機関　(財)長野県埋蔵文化財センター
4 調査担当者　伴　信夫・野村一寿ほか
5 遺跡の種類　集落跡・自然流路跡
6 遺跡の年代　弥生時代中期～後期、古墳時代前期～後期、奈良時代、平安時代、中世
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

遺跡は長野市の北東、千曲川と犀川が合流する地点に近接した中洲状の微高地に位置する。榎田遺跡では古墳時代中期～後期に集落が継続して営まれるものの、七世紀末～八世紀初頭には集落が一時期断絶する。八世紀中葉以降に再び数棟の住居が登場し、九世紀中葉～後葉に約三〇棟の住居と数条の溝が確認された。しかし、一〇世紀以降の遺構は殆ど検出されておらず、集落が断絶した可能性がある。

木簡(1)が出土した溝SD三三は、遺跡南部に位置する。幅一二m深さ四〇cmを測り、南東～北西方向に三〇m程検出した。木簡は一層から、九世紀中葉～後葉を主体とする土器とともに出土している（一〇世紀代の緑釉陶器も数片出土）。同溝では、他に木製の糸巻き、曲物なども見られる。また近接する溝跡SD四七では「乙貞」と組み合わせ文字で書かれた墨書土器一〇〇点以上や、緑釉陶器、皇朝十二銭の一つ饒益神宝一点などが出土した。

土器の墨書「乙貞」

榎田遺跡では、南部の溝跡群において右のような特殊な遺物の出土が目立つのに対し、そこから約五〇〇m離れた北部の住居跡群では、墨書土器や緑釉陶器が殆ど出土しないのが特徴である。

木簡(2)が出土したSG三は、遺跡中央部に位置する。自然流路と推定され、幅約三〇m深さ約三mを測り、南西～北東方向に五〇m程検出した。SG三では四層以下で古墳時代の遺物が大量に出土した。しかし木簡は三層より出土しており、共伴遺物も殆ど見られないため、帰属時期を推測することは難しい。

8　木簡の釈文・内容

SD三三

(1)　十七□〔日カ〕百九十三束　十八日百□□　十九日百□〔三カ〕束　廿日百七□
□□　□廿一□〔百カ〕□〔束カ〕三□□□□　□□卅□□□□〔卅〕七□〔束カ〕
□□六百十二束十日百六十四束十一日百廿四束十二日廿□〔廿カ〕〔九カ〕
□百八十八□〔束カ〕　十七日百六十九束十八□〔日百廿カ〕□□三束　西室□□〔内カ〕

246×(58)×5　081

SG三

(2)　・「□〔甕カ〕甕　甕　甕　」
・「□□□□」

243×20×4　051

(1)は全体に材の劣化が著しい。両側面は劣化が激しく、本来の左右両側面が残存しない可能性が高い。上端は平面もしくは側面削り、下端は切りの可能性が高い。上下とも端部に文字がかかったり近接していることから、文字の記録後に上下ともに切断された可能性が高く、本来は上下の欠損部にも文字が記されていたと推定される。

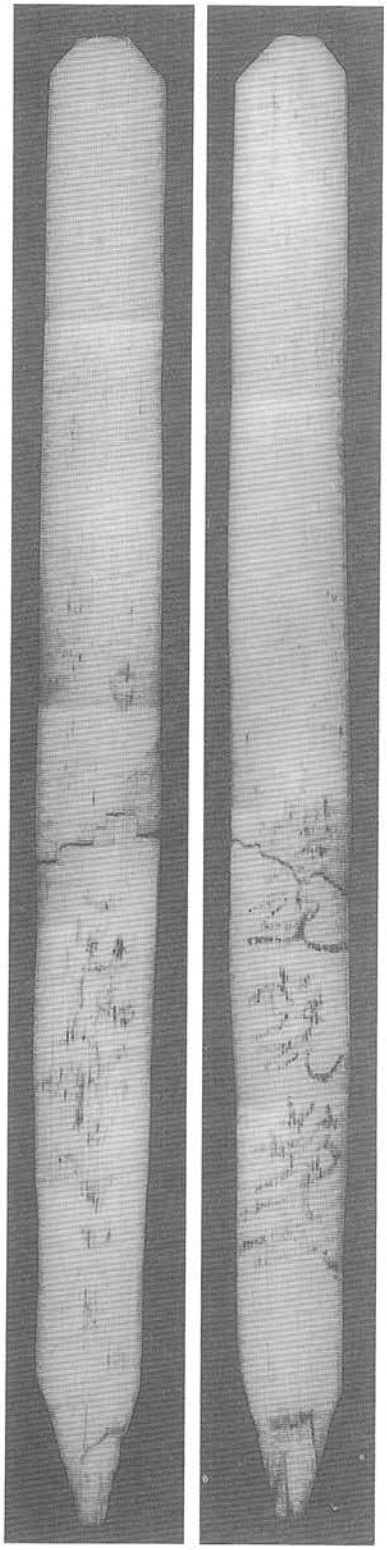
本木簡には束数が日次に記されており、収穫（収納）を一日ごとに記した「日記」の木簡である可能性が考えられる。しかし何の束数を数えたのかは不明である。判読できる部分から推測すると、最低二ヵ月にわたる記録と考えられ、各日とも百束以上の束数が記されている。また四行目にやや大きめの字で書かれている「西室」は収納場所を指す語の可能性がある。

(2)は、上端は台形状に成形し、角稜を平面もしくは側面削りにより調整。下端は剣先形に近い縦長の台形状に成形し、側面削りにより調整。上下両端面は無調整。表裏剝ぎ取り。中央部の割れは自然の欠損。材を成形し、調整をした後に墨書したものと考えられる。

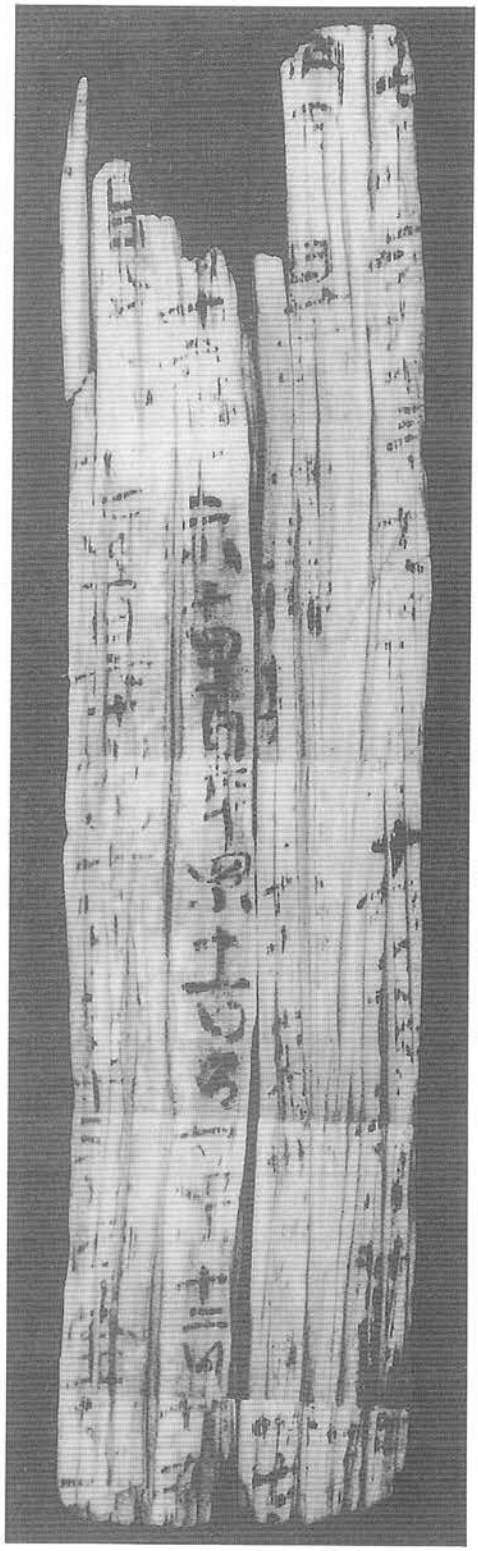
9　関係文献

長野県埋蔵文化財センター『榎田遺跡』（一九九九年）（広田和穂）

(1)



(2)



(1)

宮城・一本柳（いっぽんやなぎ）遺跡

1　所在地　宮城県遠田郡小牛田町字新一本柳・一本柳・塩釜

2　調査期間　一九九八年（平10）六月～一二月

3　発掘機関　宮城県教育委員会

4　調査担当者　伊藤　裕・菅原弘樹・岩見和泰

5　遺跡の種類　集落跡・屋敷跡

6　遺跡の年代　奈良・平安時代、中世、近世

7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

一本柳遺跡は、県北中央部の大崎低地東縁部に位置し、鳴瀬川左岸に形成された標高約一〇ｍの自然堤防上に立地する。奈良・平安時代、中世、近世の複合遺跡で、東西五〇〇ｍ以上南北二〇〇ｍ程の広がりをもつ。

調査は鳴瀬川中流域堰関連工事に伴うもので、一九九五年度以降継続して行なっており、今年度までに約一七〇〇〇㎡の事前調査を実施した。

調査の結果、中世では、道路・溝、塀によって区画された一辺七〇～一〇〇ｍほどの方形の屋敷が、川沿いのほぼ同じ場所に重複していくつも営まれていることが明らかになった。屋敷地内からは、掘立柱建物や井戸約二七〇基をはじめとする多数の遺構が発見されており、少なくとも鎌倉時代後期から戦国時代頃まで存続していたことがわかってきた。

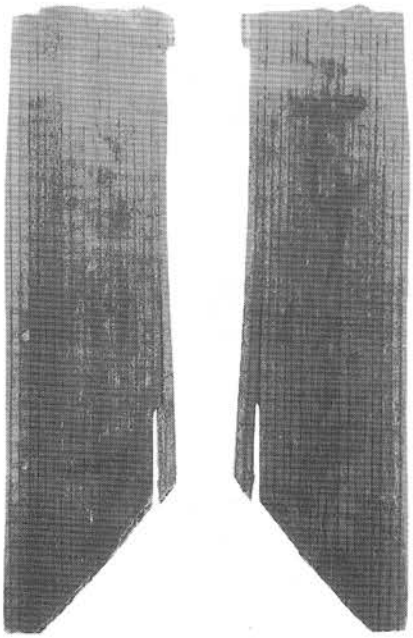
今回報告する木簡は、遺跡のほぼ中央部で、東西約一〇〇ｍ南北二〇ｍ以上の屋敷を囲む溝（ＳＤ五八九）から出土した。溝の規模は上幅三～四ｍ深さ一・五ｍ程で、年代は一三世紀中葉～一四世紀中葉頃と推測される。

共伴する遺物には、かわらけ・国産陶器（常滑・渥美・古瀬戸）・中国陶磁器（青磁・白磁・青白磁・黄釉・鉄釉）・漆器・石鍋・茶臼などがある。とりわけ青白磁梅瓶・白磁四耳壺・黄釉盤といった希少な中国陶磁器や茶道具（鉄釉茶入れ・茶臼）の存在は、屋敷居住者の階層の高さを示唆している。

8　木簡の釈文・内容

(1)　・「二斗□□□
　　□
　・「□□　□　□

(102)×28×4　019



下半は切断されている。「二斗」という語句と、上端から一cm程下に紐をかけた痕跡があることから、荷札かと思われる。

（1～7菅原弘樹、8吉野　武）

木簡研究第一七号

巻頭言――書は言を尽くさず、言は意を尽くさず――　佐藤宗諄
一九九四年出土の木簡
概要　平城宮跡　平城京跡左京三条一坊十二坪　平城京跡　平城京跡左京七条一坊十六坪　東大寺　奈良女子大学構内遺跡　高安城関連遺跡　藤原宮跡　藤原京跡左京七条一坊東南坪　藤原京跡左京十一条三坊　長岡京跡(1)　長岡京跡(2)　長岡京跡(3)　平安京跡左京四条一坊一町　平安京跡左京八条三坊十四町　平安京跡右京八条二坊二町　慈照寺境内　客坊山遺跡群　大坂城跡　袴狭遺跡　見蔵岡遺跡　有年原・田中遺跡　梶子北遺跡　曲金北遺跡　伊興遺跡　錦糸町駅北口遺跡　宮町遺跡　前橋城遺跡　荒田目条里遺跡　矢玉遺跡　山王遺跡　大坪遺跡　中尊寺境内金剛院　花立Ⅱ遺跡　志羅山遺跡　福井城跡　大友西遺跡　石名田木舟遺跡(1)　石名田木舟遺跡(2)　北高木遺跡　水橋荒町遺跡　山木戸遺跡　上郷遺跡　陰田小犬田遺跡　米子城跡七遺跡　三田谷Ⅰ遺跡　吉川元春館跡　田村遺跡群　姉川城跡　中園遺跡Ⅲ区
一九七七年以前出土の木簡（一七）
平城京跡左京二条二坊六坪
刻歯簡牘初探―漢簡形態論のために―　籾山　明
新潟特別研究集会の記録
国史跡指定答申なった八幡林官衙遺跡…小林昌二、八幡林遺跡の時代的変遷…田中靖、古代越後平野の環境・交通・官衙…坂井秀弥、封緘木簡考…佐藤信、八幡林遺跡木簡と地方官衙論…平川南、討論のまとめ
書評　鬼頭清明著『古代木簡の基礎的研究』　今津勝紀
彙報

須価　五五〇〇円　送料六〇〇円

宮城・市川橋（いちかわばし）遺跡

1 所在地　宮城県多賀城市市川字館前

2 調査期間　一九九五年調査　一九九五年（平7）七月～一二月
一九九七年調査　一九九七年四月～一一月
一九九八年調査　一九九八年四月～一一月

3 発掘機関　宮城県教育委員会

4 調査担当者　加藤道男・古川一明・佐久間光平・村田晃一
茂木好光・岩見和泰・早川英紀・東理浩明
八嶋伸明・星　清

5 遺跡の種類　集落跡

（仙　台）

6 遺跡の年代　弥生時代～江戸時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

市川橋遺跡は、古代の陸奥国府・多賀城跡の南側の沖積地に立地する。周辺には多賀城跡をはじめ山王遺跡・水入遺跡・高崎遺跡など、古代を中心とした大規模な遺跡群が分布している。

今回の調査は都市計画道路建設に伴うもので、一九九五年度から四年間継続して行なった。対象地は多賀城跡外郭南辺の南約二〇〇mに位置する、東西約四五〇m南北約一五～二五mの範囲である。

調査の結果、調査区のほぼ中央で、多賀城南門から南に延びる南北大路を検出した。道路の幅は一八～二三mほどである。道路の西側では古墳時代から平安時代にかけての河川を挟んで、古代の掘立柱建物・竪穴住居・井戸などが多数検出された。一方、東側では水田などがみつかっている。遺物は土師器や須恵器などの土器を中心に、整理用コンテナで約一〇〇〇箱分出土している。特に河川では堆積土から約七〇〇箱にのぼる多量の遺物が出土した。

木簡は河川から六点、南北大路を覆う堆積層から一点出土した。河川は、南東から南西へと北に緩やかな弧を描くように流れていたと推定される。遺物の出土状況をみると、弧状の流路の内側にあたる南岸側から、古墳時代から平安時代までの遺物を含む砂層が古い順に堆積し、川の流路が時代が下るにつれ南から北に移動したことが確認された。

河川は堆積層出土遺物の内容から、古墳時代前期、古墳時代後期、奈良時代～平安時代初頭、平安時代の大きく四時期に分けられる。木簡は、このうち奈良時代～平安時代初頭の河川SD五〇二から九五年度調査で二点（④⑤）、九八年度調査で三点（①～③）と、平

安時代の河川SD五〇五五の堆積層から九八年度調査で一点出土している。両河川はともに幅一八m以上深さ三～四mを測る。これらの河川からは他に、多量の土器・瓦・木製品・石製品・金属製品・製鉄関係遺物などが出土しており、その中には漆紙の付着した土器や、一三〇〇点を越える膨大な量の墨書土器・刻書土器も含まれている。

漆紙文書と墨書土器についてみると、漆紙文書には歴名様文書の断簡などがある。墨書土器は一字のものが主体をしめる。複数字のものには「科上家子」「官十六酒」「造仏石西」「松竹内」などがある。また、「厨」「曰理郡□浜駅家厨」といった施設名や、「信夫」「菊多」「曰理」などの地名、「秦」「嶋足」「上万呂」などの人名のほか、人面墨書土器も多数出土している。

南北大路を覆う堆積層は、河川の埋没後および南北大路の廃絶後の湿地状の凹地に堆積した粘土層である。九七年度調査で塔婆が出土した。その他に白磁やかわらけの破片、皇宋通宝などが出土している。

8　木簡の釈文・内容

以下の木簡の釈文は、調査次数にかかわらず、遺構ごとに掲げる。

SD五〇二一

(1)
・「杜家立成雑　書要□□〔略雑カ〕書□〔略カ〕□□□〔成立家カ〕　」
・「杜家立成雑書事要略一巻雪寒呼知故酒飲書」　360×36×6　011

(2)
・「〈丸女大伴マ廣刀自□〔口カ〕□〔年カ〕□□七　」
少女
・「〈　『照勝勝　宮隅道道送道道前』」　242×20×3　032

(3)
・「〈多珂郷土□〔師カ〕マ真」
・「〈□〔獨カ〕米五斗　」　122×33×4　032

(4)
・×□〔給カ〕物事　」
・×件物□□　(65)×(33)×4　081

『□□
□〔マカ〕子虫』」（後筆重書）

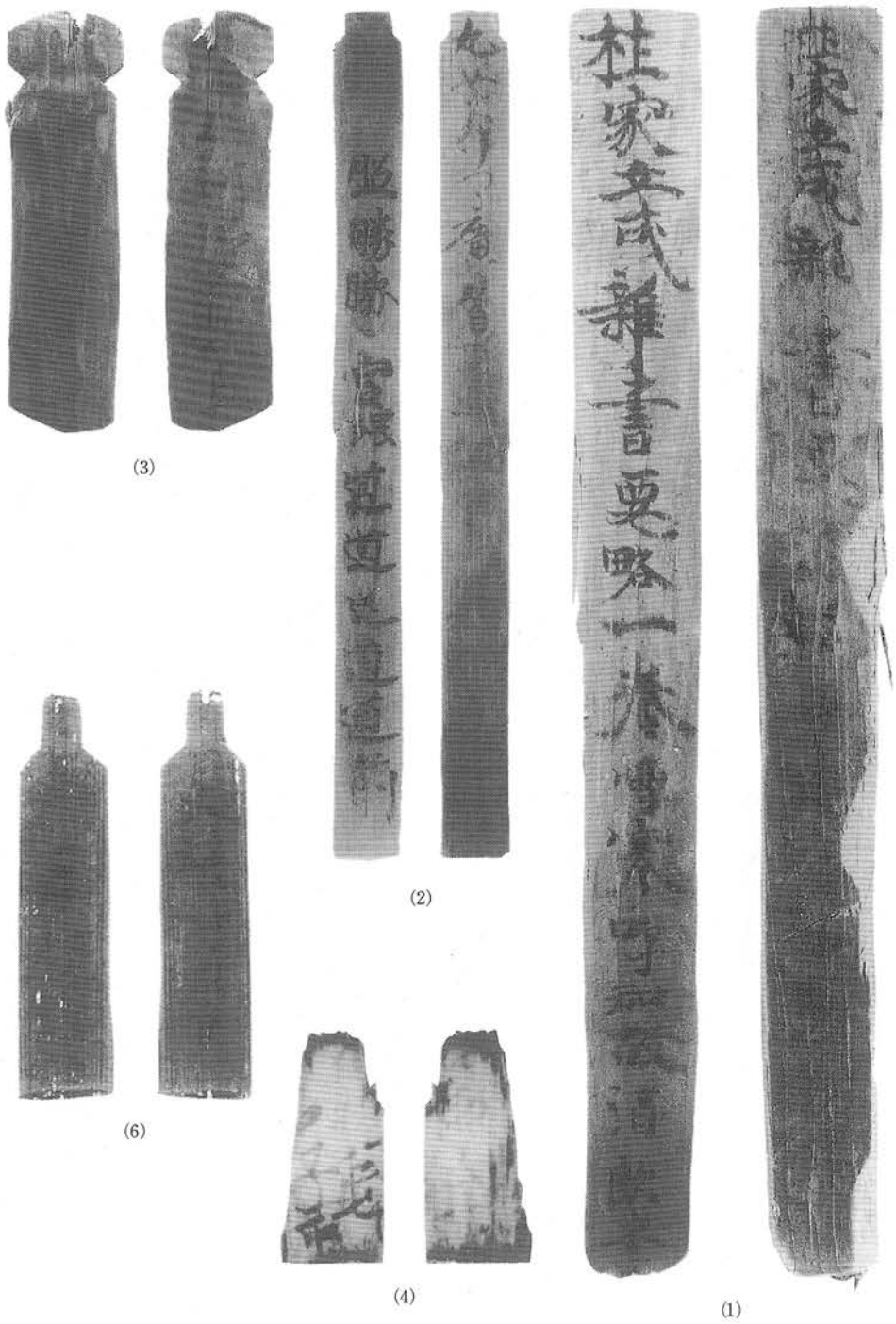
(5)
□□□　(43)×89×11　065

SD五〇五五

(6)
・「〈大□〔橘カ〕廿五□〔雙カ〕」
・「〈三□〔札カ〕　」　59×13×3　032

南北大路上の堆積層

(7)
・「南無大日如□〔来カ〕
・「□〔祢カ〕□×　(109)×19×4　061



(1)～(4) 1：2、(6) 1：1

(1)は長さ三六〇㎜、幅三六㎜の短冊型を呈する。長さと幅はそれぞれ令小尺の一尺二寸、一寸二分にあたる。樹種は檜で、両面ともかなり削りこまれている。

内容は『杜家立成雑書要略』の習書木簡である。この書は『杜家立成』とも略称し、唐から伝来した書簡の模範文例集である。成立は唐初の貞観年中頃、著者は杜正倫またはその兄の杜正蔵と推定されている。この書の写本は中国ではすでに失われ、正倉院に宝物として伝わる光明皇太后筆の一本が現存するのみである。また、出土資料にもこれまでに例がない。本木簡が初の出土例である。

本木簡は一面に『杜家立成』冒頭部書名の文字を習書し、もう一面には書名に続いて、巻数と最初の書簡文例の題が書かれている。文字は全体に固い印象を受ける書で、中心軸が揃わない。上から一気に書いたものではなく、手本の写本を見ながらゆっくり書いたものと思われる。王羲之風の書とされる光明皇太后筆の正倉院のものとは似ていない。また、文字内容も正倉院本とは若干の異同がある。本木簡の書簡文例の題の部分「雪寒呼知故酒飲書」は、正倉院のものでは「呼」が「喚」であり、また「酒」字がない。したがって、本木簡の手本となった写本は、正倉院のものとは別系統のものである可能性がある。

ところで、これまで『杜家立成』は都の皇族や貴族、太政官の曹司といったごく限られた範囲での普及が考えられてきた。しかし、本木簡の出土によって、その写本が多賀城近辺にもたらされていたことが明らかになった。その伝来・普及のあり方などの位置付けは、慎重な検討が必要と思われる。今後の課題である。なお、本木簡にはところどころに習書とは別に薄い墨痕が認められることから、内容は不明だが習書に先行する文書の存在が考えられる。

(2)は大伴マ丸女に関する個人カードのような記録簡と思われる。裏面には異筆で習書が書かれている。(3)は米の荷札である。国名を記していないので、陸奥国内の多珂郷から国府に進上された米に付けられていた荷札と思われる。『和名抄』によれば、行方郡に多珂郷、宮城郡に多賀郷があったことが知られる。(4)は重ね書きされている。いずれも破損のため内容はよくわからないが、もとは何らかの給物に関する文書木簡と思われる。(5)は用途未詳の木製品に墨書されたもので、内容は不明である。(6)は付札で、橘に付けられていたものとみられる。(7)は南北大路を覆う堆積層から出土した、唯一時代の異なる木簡で、小型の塔婆である。一一世紀以降のものである。

なお、木簡の釈読については奈良大学東野治之氏、東北大学今泉隆雄氏、国立歴史民俗博物館平川南氏をはじめとする多くの方々からご教示をいただいた。

（1～7　古川一明、8・9　吉野　武）

岩手・柳（やなぎ）之御所（ごしょ）遺跡

1　所在地　岩手県西磐井郡平泉町字柳御所

2　調査期間　第四九次調査　一九九八年（平10）五月～一〇月

3　発掘機関　岩手県教育委員会

4　調査担当者　斎藤邦雄・鎌田　勉

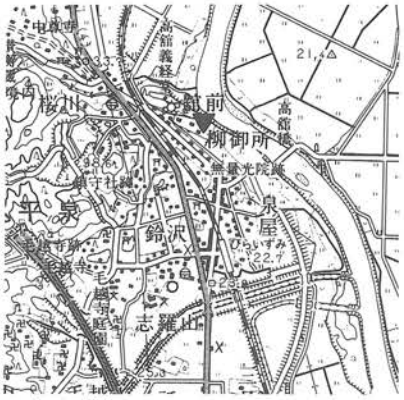
5　遺跡の種類　居館跡

6　遺跡の年代　平安時代（一二世紀後半）

7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

柳之御所遺跡は、平泉町字柳御所から字伽羅楽地内にかけて所在する。JR平泉駅の北方約六〇〇m、平泉市街地の東端に位置し、北上川によって形成された標高二五m前後の低位段丘縁辺部に立地し、その面積は約一一万㎡である。

一九八八年から実施された緊急発掘調査で、遺跡を囲む大規模な堀・園池・塀・掘立柱建物・井戸などが検出され、『吾妻鏡』に見られる奥州藤原氏三代秀衡の平泉館との推定がなされている。一九九七年度に国の史跡指定を受け、一九九八年度から当教育委員会が史跡整備のための資料収集を目的として、未調査区域を対象に調査を実施している。



（一　関）

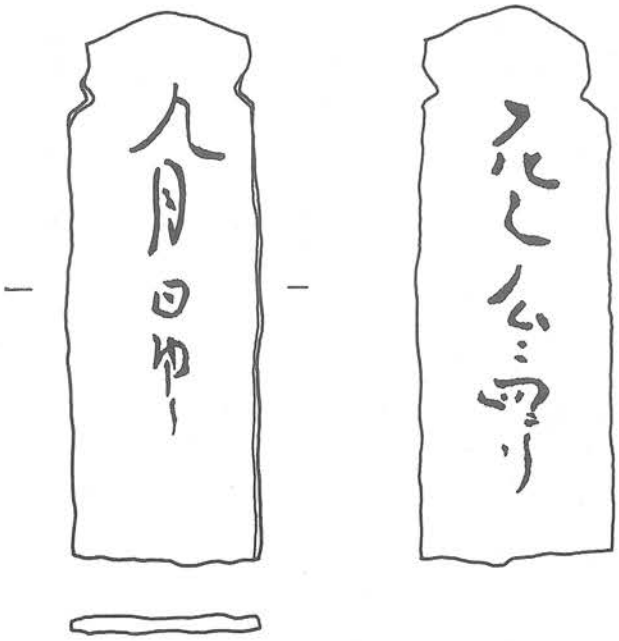
九八年度は、以前の調査で検出されていた正方位の軸線を持つ、中心建物群とされる遺構の東側の状況を把握することを目的として、調査を実施した。その結果、これら中心建物群の一部に付随すると思われる塀の他、梁行二間桁行一一間の長大な堀立柱建物、井戸などが検出された。

木簡は平面形がほぼ円形で、開口部径四・二五m深さ約三mの素掘りの井戸から出土した。この井戸は人為的に埋め戻されており、本木簡を含め遺物は埋土中位上半部に集中し、同時に多量の完形、ほぼ完形のかわらけ、木質部の残る刀子・刷毛・折敷・曲物の一部、渥美産の陶器片などが出土している。

8　木簡の釈文・内容

(1)　・「〈□之□□四□」
　　・「〈九月日納了　」　　82×28×2　032

物品に付けられた荷札と考えられる。上端の左右に切り込みがある付札型の形態で、文字の記載は切り込みの下から始められている。表裏面・上端・両側面は調整され、下端部分に切り込みを入れ折っ



た痕跡が認められる。表には物品名ないしは人名に加えて数量、裏面には月日と「納了」の文言を記載したと推定される。これは柳之御所に搬入された物品に付された付札で、その物品が納入された場所、あるいは消費された場所周辺の井戸に廃棄されたと考えられる。

釈文などについては、東京大学の佐藤信氏にご教示をいただいた。

（斎藤邦雄）

木簡研究第一六号

巻頭言　吉田　孝

一九九三年出土の木簡

概要　平城宮跡　平城京跡右京二条三坊四坪　薬師寺旧境内　大安寺旧境内　興福寺旧境内　東大寺　阪原阪戸遺跡　藤原宮跡　藤原京跡　右京九条四坊　飛鳥京跡　定林寺北方遺跡　金剛寺遺跡　下茶屋遺跡　長岡京跡(1)　長岡京跡(2)　平安京跡左京三条三坊十三町　大坂城跡(1)　大坂城跡(2)　大坂城下町跡　若江遺跡　西ノ辻遺跡　袴狭遺跡(1)　袴狭遺跡(2)　砂入遺跡　祢布ヶ森遺跡　見蔵岡遺跡　木梨・北浦遺跡　藤江別所遺跡　阿形遺跡　伊勢寺遺跡　御殿・二之宮遺跡　東中館跡　長崎遺跡　八幡前・若宮遺跡　大宮遺跡　三堂遺跡　鴨田遺跡　大戌亥遺跡　杉崎廃寺　元総社寺田遺跡　南A遺跡　安子島城跡　山王遺跡　今塚遺跡　払田柵跡　福井城跡　一乗谷朝倉氏遺跡　戸水大西遺跡　西念・南新保遺跡　八幡林遺跡　宮長竹ヶ鼻遺跡　タテチョウ遺跡　円城寺前遺跡　古市遺跡　郡山城下町遺跡　周防国府跡　初瀬遺跡　船戸遺跡　ヘボノ木遺跡　原の辻遺跡

一九七七年以前出土の木簡（一六）

平城京跡左京一条三坊十五・十六坪　山里純一

沖縄の呪符木簡について　奥野義雄

いまに息づく呪符・形代の習俗　今泉隆雄

文書木簡はいつ廃棄されるか　今津勝紀

史料紹介　近世の畳の頭板について　鈴木景二

史料紹介　近世の荷札木簡の一例

彙報

頒価　五五〇〇円　送料六〇〇円

岩手・志羅山（しらやま）遺跡

1　所在地　岩手県西磐井郡平泉町平泉字志羅山
2　調査期間　第七七次調査　一九九八年（平10）六月～八月
3　発掘機関　平泉町教育委員会
4　調査担当者　鈴木江利子
5　遺跡の種類　屋敷跡
6　遺跡の年代　一二世紀
7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

志羅山遺跡の所在地は、ＪＲ東日本平泉駅の西側に広がる地帯で、商店や町役場、銀行などが建つ、平泉町では最も建物の密集する地域である。そのため開発に伴う発掘調査の機会も多く、なっている。特に一九九二年から実施されている都市計画街路整備事業に伴い、調査面積は広がった。点であった調査個所が、徐々に面的につながって、奥州藤原氏時代の区画溝や道路、

（一　関）

建物など多くの遺構が検出され、当時の街並みや生活が明らかになりつつある。

調査は、右の都市計画街路整備事業に伴うもので、第七七次調査区は南北二〇ｍ東西一〇ｍの範囲で行なったが、そこでもこれまでの成果に関連する区画溝や塀の他、井戸や柱穴・池などを検出している。また調査区の南側は土を埋めて整地がされているが、その前後の時期にも遺構が存在する。

出土遺物は、かわらけ・陶器・磁器・鉄釘・木製品などである。調査地は低地であり水分が多いため、木製品は良好な状態を保っていた。井戸からはくり貫いて作られた木製容器・箆・椀底部、溝からは仏具（？）・砧状の物・櫛などが出土している。

今回紹介する塔婆が出土したのは、南西隅の調査区外に向かって落ち込む個所で、溝や土坑などの遺構なのか自然地形なのか、全容は明らかでない。他の遺構との切り合いから、年代は一二世紀と考えている。墨書のある塔婆は六点出土していて、他に板や杭・かわらけ・石なども混じっていた。珍しい物として、上層からは黒色漆の地に赤色漆でカエデの模様を描いた皿も出土している。

他の遺構も一二世紀と考えているが、池からは一三世紀の特徴をもつかわらけが多く出土していて、年代に広がりがみられる。

なお塔婆は他に同様の形状のものが一点出土しているが、墨書は見られない。

8　木簡の釈文・内容

(1)　「〻南无十方三世佛」　(256)×16×6　061

(2)　「〻南无佛法擁護多門天等」　366×18×2　061

(3)　「〻南无妙法蓮華経」　365×16×3　061

(4)　「〻南无阿弥陀如来」　364×18×3　061

(5)　「〻南无普賢廿」　(357)×16×2　061

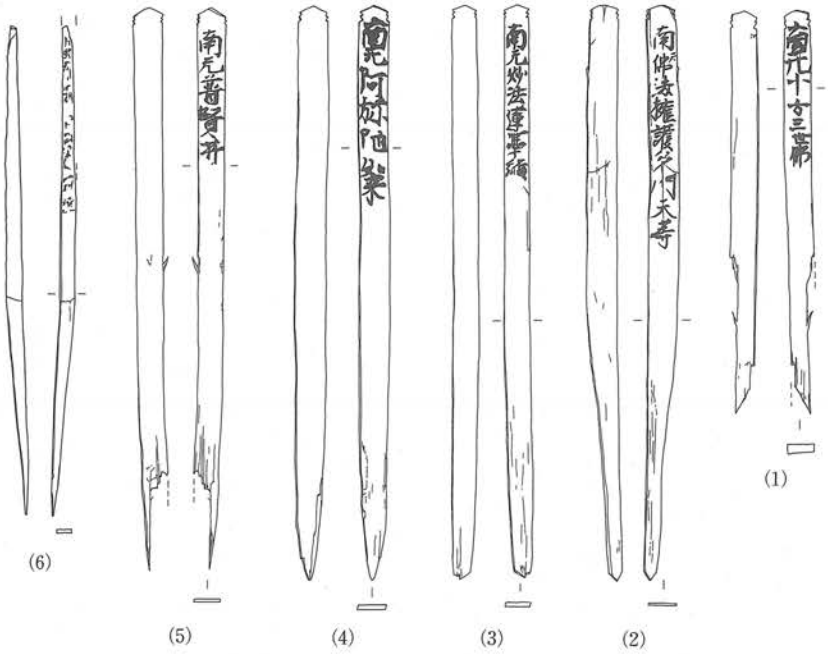
(6)　「□」　(311)×(10)×2　061

塔婆の形態は、細長い板状の頭部を山形にし、左右に二段の切り込みを設けている。ただし(6)は、頭部から左側面にかけて破損していて不明。下端部は(2)(3)が山形で、(4)(6)は尖っている。(1)と(5)とは、下端部が破損していて形は不明。長さは、完形の三点が三六五㎜前後でほぼ等しく、意識して揃えたとも考えられる。

いずれも文字は表面にのみ書かれている。(6)は墨痕が比較的明瞭であるが、判読できない。

木簡の釈読では、(財)岩手県埋蔵文化財センター羽柴直人氏、水沢市埋蔵文化財調査センター佐藤良和氏・千葉和弘氏・高橋実央氏のご教示を得た。

（鈴木江利子）



(1)　(2)　(3)　(4)　(5)　(6)

秋田・洲崎（すざき）遺跡

1 所在地　秋田県南秋田郡井川町浜井川字洲崎

2 調査期間　一九九八年（平10）五月～一〇月

3 発掘機関　秋田県埋蔵文化財センター

4 調査担当者　高橋　学・渡邊慎一・小山有希・工藤直子・山根勇人

5 遺跡の種類　集落跡

6 遺跡の年代　縄文時代、弥生時代、平安時代（九世紀）、中世（一三世紀～一六世紀）、近世

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

（五城目）

洲崎遺跡はJR井川さくら駅の北西約一km、八郎潟南東部に注ぐ井川河口域左岸、標高一m前後の沖積低地に立地する。八郎潟（干拓以前の湖岸）までは五〇〇m程の距離にある。現況は水田で、調査面積は二八一〇〇㎡である。調査区の東端では南北方向の堀が検出され、またボーリング探査によりこの堀の西約二二〇m（調査区外）に同規模、同方向の溝状の落ち込みを確認している。このことから遺跡は堀によって囲まれた集落であり、その内部では地割に関連する溝、道路を多数検出した。また井戸三〇七基のほか、掘立柱建物・竪穴状遺構・土壙墓などの遺構も存在する。この集落の年代は一三世紀後半から一六世紀に及ぶ。

木簡は整理途中であるため数量は確定していないが、現時点で計一七点あり、その他に的など三点の墨書のある木製品が出土した。材質は肉眼観察ではあるがすべて杉と思われる。今回はその中から木簡二点を紹介する。

(1)は井戸SE五八七から出土したものである。この井戸は切断した丸木舟を井戸枠に転用したもので、枠の内部に井筒として曲物が埋設されている。木簡は井筒と枠の隙間に横向きの状態で据えられていた。またこの井戸は、枠の外側から出土した縦板の年輪年代測定により、一二八六年以降に構築されたものと判明している。

(2)は東側の堀SD四九から出土した。この堀は幅約五m深さ約一mの規模で、遺跡の東端を南北に走っている。遺物としては、箸状木製品・漆塗り椀・下駄など多量の木製品、陶器類が出土している。またこの堀からは、的の一部が出土している（直径二一三㎜、厚さ六㎜）。中心には径三㎜の貫通孔がある。コンパスのようなもので同心円状の刻線を施し、その間に三重の縞状に墨を入れている。

短冊状に加工されており、転用材として使用されていた可能性がある。

8　木簡の釈文・内容

井戸SE五八七

(1)　「　　アラツタナヤ□□□
　　〈ニトテ候へ
　　（僧侶の絵）　（人魚の絵）
　　そわ可　」　806×145×5　011

堀SD四九

(2)　「□□」　185×29×4　051

(1)は若干の欠損箇所が認められるが、ほぼ原形を留めているものと考えられる。板の上半にのみ文字と絵が書かれている。文字は三行あり、絵は上に僧侶、下に人魚が描かれている。当時、凶兆と捉えられることの多かった「人魚」に対し、除災の供養をしている様子を描いたのではないかと推測される。なお文末の「そわ可」は梵語で「成就」を意味する。

(2)は上端を尖らせた木簡で、原形を留めている。墨書は片面のみに見られるが判読不能である。

（工藤直子）

(1)

(2)

金沢市埋蔵文化財センター編集・発行

『堅田B遺跡発掘調査概報』（金沢市文化財紀要一五一）

金沢市埋蔵文化財センターによる発掘調査で、鎌倉時代の館跡が検出され、それを取り囲む溝から卒塔婆とともに二点の巻数板が出土した、堅田B遺跡の報告書が刊行された。

巻数板は縦一一・二cm横七九・〇cmと縦一六・二cm横八二・〇cmとで、いずれも般若心経の全文を記している。前者は弘長三年（一二六三）、後者は建長三年（一二五一）の年紀をもつ。これらは正月八日、修正会の結願の日に門前に吊り下げられたものと考えられている（本誌第二〇号参照）。報告書には巻数板に関する文献・絵画・民俗資料を合わせ載せている。

A四版　三六頁　カラー印刷　一九九九年三月刊

頒価　一、二〇〇円、送料　二四〇円

残部僅少

連絡先

石川考古学研究会

〒九二一-一三三六　金沢市中戸町一八番地一

石川県埋蔵文化財センター内

振替口座　〇〇七四〇-五-一九六九一

電話・FAX　〇七六-二二九-五五二八

（埋文センターの電話　〇七六-二二九-四四七七）

埋蔵文化財写真技術研究会編集・発行

『埋文写真研究』第一〇号

文化財写真の技術・情報などに関する記事を載せ、文化財調査に携わる人必携のマニュアル書である『埋文写真研究』の最新号が刊行された。

内容は川瀬敏雄「原板のサイズと撮影状態の違いによるデジタル画像の評価について」、井上直夫「光質の違い」、村井伸也・幸明綾子・牛嶋茂「遺跡撮影　その四　断面（セクション）を撮る」など多数。

B五版　一四八頁　カラー図版多数　一九九九年七月刊

頒価　三、五〇〇円

送料　四冊まで五〇〇円、五～一〇冊まで一、〇〇〇円、一一冊以上は無料

三号以前は品切れ

連絡先

埋蔵文化財写真技術研究会（会長　佃　幹雄）

〒六三〇-八五七七　奈良市二条町二丁目九-一

奈良国立文化財研究所内

電話〇七四二-三四-三九三一

郵便振替　〇一〇五〇-九-九九三〇

埋蔵文化財写真技術研究会

『木簡研究』在庫状況のお知らせ

頒価

一～四号　品切れ　　五・六号　三五〇〇円
七～一二号　三八〇〇円　一三号　四三〇〇円
一四・一五号　四五〇〇円　一六～二〇号　五五〇〇円

送料

一冊　六〇〇円　二冊　八〇〇円　三冊　一〇〇〇円
四冊　一二〇〇円　五～一〇冊　一五〇〇円
一一～二〇冊　二〇〇〇円

※個人購入の場合は代金前納です。代金と送料は郵便振替で〇一〇〇〇―六―一五二七　木簡学会までお送り下さい。

※大学・博物館など公的機関の場合は代金後納です。銀行振込か右の郵便振替でお願いします。

口座番号　第一勧業銀行西大寺支店
普通預金　一一一〇三一五
口座名　木簡学会　佐藤宗諄（さとう　そうじゅん）

連絡先　〒六三〇―八五七七　奈良市二条町二丁目九番一号
奈良国立文化財研究所
平城宮跡発掘調査部史料調査室気付
木簡学会
電話　〇七四二―三四―三九三一（内二三九）

一九七七年以前出土の木簡（二一）

奈良・平城（へいじょう）京跡左京二条二坊十坪

1　所在地　奈良市法華寺町

2　調査期間　平城宮跡第八〇次発掘調査　一九七二年（昭47）一一月～一二月

3　発掘機関　奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部

4　調査担当者　代表　坪井清足

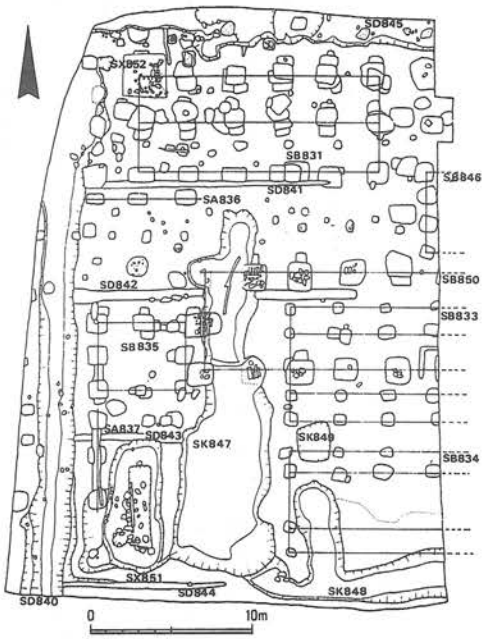
（奈　良）

5　遺跡の種類　寺院跡

6　遺跡の年代　奈良時代、平安時代

7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

調査地は平城京跡左京二条二坊十坪の西北隅にあたり、法華寺阿弥陀浄土院推定地に含まれる。阿弥陀浄土院は光明皇太后の発願により、法華寺の西南隅に建立された寺で、天平宝字三年（七五九）に造営が開始され、彼女の死後の同四年一二月に完成した。調査区の東南隅から約二〇mの所には、阿弥陀浄



遺　構　図

土院の庭の石と伝える花崗岩が水田中に立つ。調査面積は九六〇㎡。

調査区内では奈良時代の建物七棟・溝四条・柵二条、それに平安時代以降の土坑三基・溝二条などを検出した。奈良時代の遺構はA・B二時期に分けられる。A期は東西棟の掘立柱建物四棟、溝四条、B期は東西棟掘立柱建物三棟（うち一棟は後に礎石建物に建て替える）などがある。A期は阿弥陀浄土院造営以前、B期は造営以後とみられる。

木簡は五点出土したが、うち一点(1)は調査に先立ち、発掘区北方約二〇mの地点で、調査用電柱を埋設した際に出土したものである。遺構の性格は不明だが、平城宮との間を走る東二坊坊間大路の東側溝にあたるかと推測されている。(2)は西辺の径約三〇㎝の小土坑から、(3)は調査区中央にあり、長さ二二m最大幅五m、深さ〇・三～〇・六mの南北に長い平安時代の土坑から出土した。

8　木簡の釈文・内容

東二坊坊間大路東側溝

(1)　・「坤宮官縫殿出米参斗　右薪買　」

　　・遣如件　五月廿八日舎人池後小東人」227×26×4　011＊

小土坑

(2)　・□□□□□會會會會□□〔會會會會會カ〕

　　・□　□　□　□〔會會カ〕　(196)×(11)×2　081

土坑

(3)　十九本　091

(1)「坤宮官」は天平宝字二年（七五八）八月に、藤原仲麻呂の主導で官名を改めたときに、光明皇太后の紫微中台を改称したものである。同四年六月の皇太后の没後まもなく廃止されたとみられる。

9　関係文献

奈良国立文化財研究所『昭和四七年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報（二）』（一九七三年）

同『奈良国立文化財研究所年報一九七三年』（一九七三年）

同『平城宮発掘調査出土木簡概報』九（一九七三年）（舘野和己）

彙　報

第二〇回総会および研究集会

木簡学会第二〇回総会および研究集会は、一九九八年一二月五・六日に、奈良国立文化財研究所平城宮跡資料館講堂において、一七九人の会員の参加を得て開催された。会場には、平城宮・平城京跡、飛鳥池遺跡、細工谷遺跡の出土木簡、長屋王家木簡が展示され、併せて観音寺遺跡、難波宮跡の出土木簡の写真が展示された。今回は、一日目に木簡学会創立二〇周年を記念して長屋王家木簡を主題にしたシンポジウムを、二日目に総会および研究集会を開催した。

◇一二月五日（土）（午後一時～六時）

狩野久会長の開会の挨拶の後、シンポジウムを開催した。

研究集会　シンポジウム「長屋王家木簡をめぐって」

コーディネーター　東野治之氏

削屑からみた長屋王家木簡　渡辺晃宏氏

長屋王家の米支給関係木簡　勝浦令子氏

長屋王家の経済基盤と荷札木簡　櫛木謙周氏

◇一二月六日（日）（午前九時～午後三時）

第二〇回総会（議長　小林昌二氏）

会務報告（舘野和己委員）

会員の状況（新入会員九名を含め、個人会員三三三名、海外会員三名、団体会員四団体）、学会創立二〇周年記念事業として、長野特別研究集会を実施したこと（六月）、長屋王家木簡のシンポジウムを開催したこと（今次研究集会一日目）、『日本古代木簡選』の続編の編集を進めていること、および常任委員会の開催状況や幹事の交替などが報告された。

長野特別研究集会報告（平川南委員）

六月五・六日に、長野県更埴市において、長野県立歴史館および長野県埋蔵文化財センターとの共催で開催された特別研究集会について、計二一三名（内会員は一二三名）の参加をえたことなどが報告され、あわせて決算報告がなされた（詳細は本誌第二〇号）。

編集報告（清水みき委員）

『木簡研究』第二〇号の編集過程について、より正確な釈文を提供するため「釈文の訂正と追加」欄を新設したことと、これに伴い凡例の位置を変更したことなどが報告された。

会計・監査報告（山中敏史委員・岩本次郎監事）

山中委員から一九九七年度の一般会計および特別会計の決算報告が行なわれ、岩本監事から会計事務は適正に執行、処理されている旨の監査報告がなされた。次いで山中委員から一九九九年度の予算

案が提案された。

以上の案件は、すべて異議なく了承された。

役員改選

次期（一九九九・二〇〇〇年度）の委員および監事について、鎌田元一氏から提案があり、委員会推薦の全候補が承認された（三一二ページ参照）。

研究集会

報告（司会　佐藤信氏）

一九九八年全国出土の木簡　舘野和己氏

観音寺遺跡出土の木簡　和田萃氏・藤川智之氏

前期難波宮出土の木簡　佐藤　隆氏

飛鳥池出土の木簡　寺崎保広氏

舘野氏の報告は、例年どおり、全国の出土木簡・遺跡（六一遺跡）について説明したもので、その多くは本号に収録できた。他の三報告は、いずれも七世紀木簡を対象とした。

討論（司会　西山良平氏）

四報告に対する質疑・討論が行なわれたが、とくに観音寺遺跡出土木簡以下の三報告がいずれも七世紀木簡であるため、活発な討論が行なわれ、当該遺跡・木簡への関心と理解を深めることができた。

最後に、佐藤宗諄副会長の挨拶で、研究集会を終了した。

委員会報告

◇一九九八年一二月五日（土）午前一〇時三〇分～午後〇時　於奈良国立文化財研究所

総会に先立ち、会務、編集、会計報告があり、総会・研究集会の運営、役員の改選、創立二〇周年記念事業、九九年度予算案などについて協議を行なった。

なお、次期（一九九九・二〇〇〇年度）委員に選出された委員が、六日の総会後、先例により委員会を開き、次期会長に佐藤宗諄氏、副会長に鎌田元一・田辺征夫の両氏を選出した。

◇一九九九年六月七日（月）午後三時～午後五時　於奈良国立文化財研究所

会務報告の後、新規常任委員の委嘱（鎌田元一・清水みき・山中敏史・舘野和己・山下信一郎・鶴見泰寿の六氏）および幹事の委嘱（岩宮隆司氏）が承認された。一九九八年度一般会計および特別会計の決算報告および監査報告が行なわれ、承認されたが、会計処理へのコンピュータ導入の可能性や海外会員への会誌の送料などについて意見が出された。次いで入会審査が行なわれた。会誌第二一号の編集状況（担当は清水みき・舘野和己委員）、第二一回総会・研究集会の予定について報告があり、協議を行なった。また、併せて二〇周年記念出版の進捗状況について説明が行なわれた。

◇一九九九年一一月四日（木）午後三時～午後五時　於奈良国立文化財研究所

新規入会者一〇名の承認と退会者の確認を行なった。ついで会誌第二一号の編集経過に関する報告があった。また第二一回総会・研究集会の内容を承認した。一九九九年度会計中間報告の審議などを行なうとともに、さらに創立二〇周年記念出版の準備状況について報告があった。

（増渕　徹）

木簡学会役員（一九九九・二〇〇〇年度）

会長　佐藤　宗諄

副会長　鎌田　元一　田辺　征夫

委員　今泉　隆雄　岩本　正二　櫛木　謙周
栄原永遠男　佐藤　信　清水　みき
舘野　和己　寺崎　保広　東野　治之
西山　良平　平川　南　本郷　真紹
籾山　明　山中　敏史　和田　萃
渡辺　晃宏

監事　石上　英一　岩本　次郎

幹事　岩宮　隆司　鷺森　浩幸　鈴木　景二
鶴見　泰寿　土橋　誠　西村さとみ
古尾谷知浩　増渕　徹　山下信一郎
山本　崇　吉川　聡　吉川　真司

PROCEEDINGS OF JAPANESE SOCIETY FOR THE STUDY OF WOODEN DOCUMENTS

NO. 21 1999

Contents

Foreword ····· ISHIGAMI Ei'ichi····· i

Wooden Writing Tablets Recovered in 1998 ····· 1

Outline ····· TATENO Kazumi····· 1

Explanatory Notes ····· 6

Nara Prefecture: Block 15, West First Ward on Seventh Street of Nara Capital Site; Akishino-Misasagi Site; former precinct of Yakushiji Temple; Northwest Block, West Fourth Ward on Sixth Street, Fujiwara Capital Site; Southwest Block, East Third Ward on North Fifth Street, Greater Fujiwara Capital Site; Asuka-ike Site; East Asuka-ike Site; Asuka Higashi Kaito Site; Kawaharadera Temple Site; Kibi-ike Abandoned Temple Site

Kyoto Prefecture: Nagaoka Palace Site; Block 15, East Third Ward on Third Street, Heian Capital Site; Block 8, East Seventh Ward on Second Street, Heian Capital Site, and Honkokuji Temple; Toba Site and Toba Detached Palace Site; Ōyabu Site; Kōdomiya-no-mae Site; Mushagatani Site; Kōmori Site

Osaka Prefecture: Naniwa Palace Site; Ōsaka Castle Town Site; Chōboji Temple Site; Mizokui Site; Tamagushi Site

Hyogo Prefecture: Tsurisaka Site; Katsu Site; Toyo'oka Jōkan Site; Iwai Kareki Site; Miyauchi Kuroda Site; Himeji Eki Shūhen Dai Yon Chiten Site (provisional name); Furu'aboshi Site

Mie Prefecture: Rokudai A Site; Okunogaito precinct, Kushida Chikunai Sites;

Uchigaitō Site
Kanagawa Prefecture: Utsunomiya Zushi Bakufu Site
Tokyo Prefecture: Shiodome Site; Edo Castle Outer Moat Site (Yotsuya Gomongai Hashizume, Ohoribata Dōri, Machiya remains); Hōkōji Temple Site; Hakuō Site; Ikenohata Shichikenchō Site; Sensōji Site; Kami Chiba Site
Shiga Prefecture: Miyamachi Site; Odani Castle Site (remains held to be the Chizen'in); Ono'ehama Site
Nagano Prefecture: Yashiro Sites (in conjunction with the Hokuriku Shinkansen); Enokida Site
Miyagi Prefecture: Ippon'yanagi Site; Ichikawabashi Site
Iwate Prefecture: Yanaginogosho Site; Shirayama Site
Yamagata Prefecture: Ushiroda (formerly Gakki) Site
Akita Prefecture: Suzaki Site
Fukui Prefecture: Fukui Castle Site 1; Fukui Castle Site 2
Ishikawa Prefecture: Kamino Site; Katada B Site; Hirosaka Site
Toyama Prefecture: Nakaho B Site; Higashi Kizu Site; Tochidani Minami Site
Niigata Prefecture: Enoi A Site; Shimono Nishi Site; Ipponsugi Site; Sunayama Nakamichishita Site; Shimomachi-Bōjō Site Location C; Funato Kawasaki Site
Shimane Prefecture: Santadani I Site
Okayama Prefecture: Kumayamada dispersion; Okayama Castle Second Keep remains (Chūgoku Electric transformer facility); Shinmichi (Seikishō) Site; Yoneda Site; Hyakkengawa Yoneda Site
Hiroshima Prefecture: Yokka'ichi Site; Shimo Uwado Site
Yamaguchi Prefecture: Naganobori Dōzan remains
Tokushima Prefecture: Kannonji Site
Ehime Prefecture: Hirata Shichitanji Site
Fukuoka Prefecture: Moto'oka Sites
Wooden Writing Tablets Recoverd Before 1977 (21) ····· 215
Nara Capital Site, Nara Prefecture ····· 215
Amendments and Additions (2) ····· 217
Nagaoka Capital Site, Kyoto Prefecture (No. 18); Higashi Asakayama Site, Osaka Prefecture (No. 20); Ikō Site, Tokyo Prefecture (No. 19)
Record of the Symposium on Wooden Tablets Found at Prince Nagaya's Mansion
The Prince Nagaya Household Wooden Tablets as seen through Shavings ····· WATANABE Akihiro ····· 224
Wooden Tablets Related to Rice Expenditures of the Prince Nagaya Household ····· KATSU'URA Noriko ····· 248
Wooden Shipping Labels and the Economic Basis of the Prince Nagaya Household ····· KUSHIKI Yoshinori ····· 271
Summary of the Discussion ····· TŌNO Haruyuki ····· 293
Photographing Wooden Tablets ····· INOUE Tadao ····· 295

Book Review
IMAIZUMI Takao, *Kodai mokkan no kenkyū* [Research on Ancient Wooden Tablets] ……MORI Kimiyuki…… 303
Bulletins……MASUBUCHI Tōru…… 310
Editor's Notes ……SHIMIZU Miki…… 312
Columns:
Mortuary Records (Lacquer-permeated Documents) Unearthed from Nagaoka Palace Site……SHIMIZU Miki…… 219
Mortuary Records (Lacquer-permeated Documents) Unearthed from the Akita Castle Site……YOSHIKAWA Satoshi…… 222
On the Nomenclature for the Street Grid of Fujiwara Capital ……TERASAKI Yasuhiro…… 309

Published by
JAPANESE SOCIETY
FOR THE STUDY OF WOODEN DOCUMENTS

木簡研究 第二一号

一九九九年十一月二十日 印刷
一九九九年十一月二十五日 発行

〒630-8577
奈良市二条町二丁目九番一号
奈良国立文化財研究所
平城・史料調査室 気付

編集発行 木簡学会
会長 佐藤宗諄

TEL (〇七四二) 三四—三九三一
E-mail mokkan@nabunken.go.jp
振替口座 01000—六—一五二一七

印刷 〒600-8475
京都市下京区油小路仏光寺上ル
真陽社
TEL (〇七五) 三五一—六〇三四

ISSN 0912-2060

ISSN 0912-2060

ISSN 0912-2060